

東洋復興運動

第一輯 トッレフンパ

特251

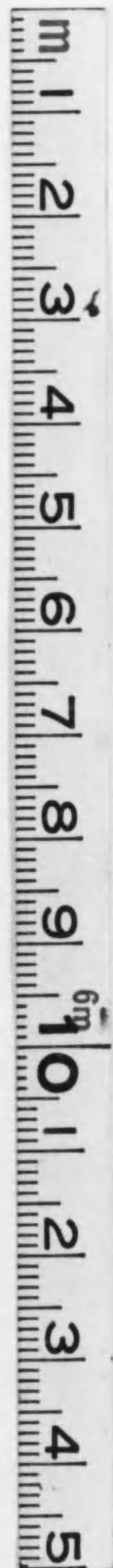
31

674

世界文明批判

社會教育會編

SEN



始



特251
31



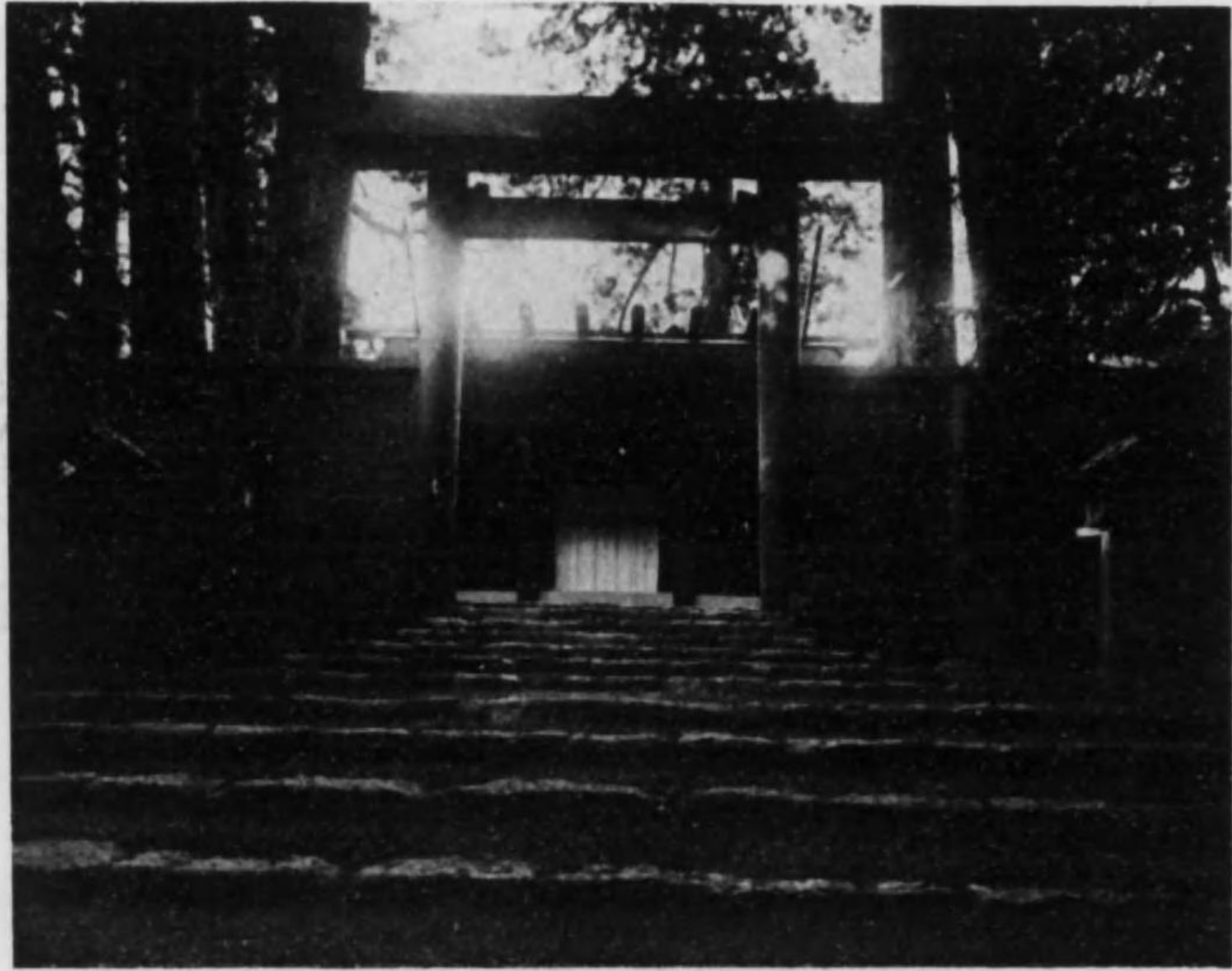
世界文明批判

東洋復興運動資料

パンフレット第一輯

文 部 省 内
法 財 人 團 社 會 教 育 會





神宮司廳藏

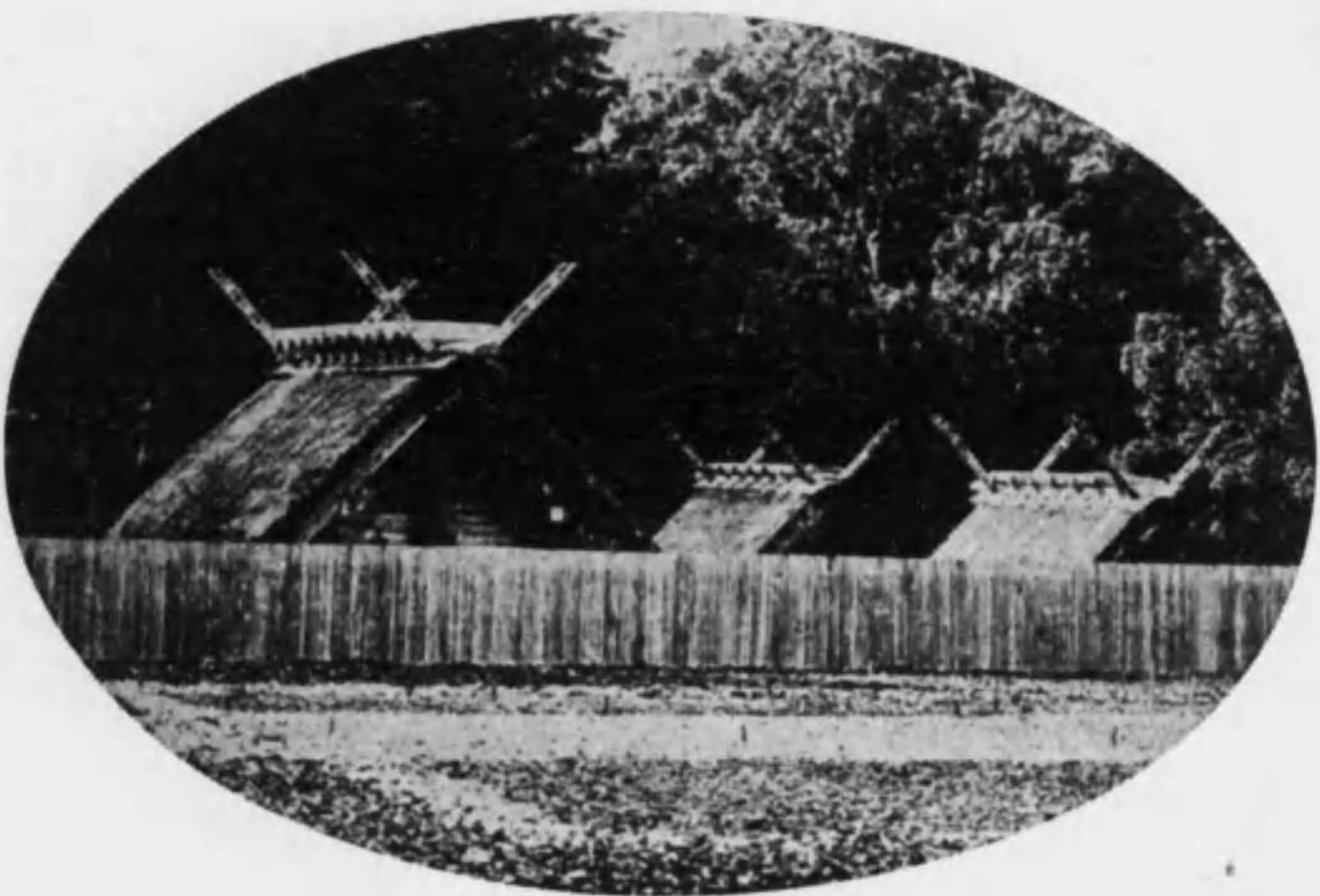
東洋書院出版

昭和十一年

世界文明叢書

編輯人 會澤洋行





伊勢神宮

その構造たるや
透明無比、明確、
開放的、單純。…
…そして又材料が
…檜材、屋根の
藁。…このやう
な純一を保ちなが
ら、…他の追従
を許さぬほどのブ
ロポーションに取
り纏められて…
…總てが究極の純一
である。…一言
にして言へば、そ
れは「建築」の神
祠でさへある。
—ブルノー・タウト

緒言

現代文化の破綻、それはもはや蔽ふべからざる事實である。現代文化の基調を成すものは西洋文化である。『西洋の没落』の叫びに次ぐ所謂不安の思想の流行は、自己の文化に信頼を失ひ、盲動に疲れた西洋人自身のストラッグルを示すものに外ならない。

行詰つた現代文化を正道に戻すためには、先づ文化の眞の意味を充分に認識しなければならぬ。従來人々は文化、文明が物質的條件の整備以上のものであることを忘れてゐたのではないか。我々はこの語に於て果して、何を會得すべきであるか。東洋に於ける文明とは何であつたか。

近時に至つて漸く歐米の一部の識者の間にも、東洋文化の本質を把握し、之によつて活路を得んとする要求が見られる。此の時に當り、本書は博く人類の文化的努力を顧み、曾て東洋に發揮された文明の眞意を明にし、以て文化の建立に資せんとするものである。

本文中に用ひた紀元は論述の便宜上西曆にした。

昭和九年明治節

世界文明批判 目次

一 現代の不安と東洋文化……………(一)

 (所謂科學的文明——經濟的不安——政治的不安——現代文化に對する不安——東洋文化へ反省)

二 東西兩文化の淵源と基礎……………(九)

 一、支那古代文化と孔子……………(九)

 (支那古代文化——孔子)

 二、印度文化と釋迦……………(三三)

 (印度文化の起源——釋迦——アソカ王)

三、日本文化の基礎……………(一九)

(建國の精神——聖德太子)

四、西洋文化の淵源……………(二四)

(ギリシヤ文化——ローマ——キリスト教)

三 文化の回顧と復古……………(三三)

一、支那文化に於ける復古……………(三三)

(漢——六朝——唐——宋明——清)

二、印度文化に於ける復古……………(四五)

三、日本文化に於ける復古……………(五七)

(大陸文物の移入——平安文化——武家時代——明治維新と其後の文化)

四、ルネッサンスと西洋文化……………(六三)

四 文明の復興と日本……………(七六)

一、實證としての文明……………(七六)

二、危惧すべき我が國民の文化的態度……………(八二)

寫眞

伊勢神宮……………(口繪兩面)

(一)アソカ王国地圖……………	二頁。	(二)アソカ王の詔勅を刻した石柱……………	一八頁。
(三)法隆寺俯瞰圖……………	二頁。	(四)希臘バストウムのポセイドン神殿……………	二六頁。
(五)ローマ帝國最大版圖……………	三頁。	(六)コロセウム(ローマの大圓形劇場)……………	三頁。
(七)唐代支那の地圖……………	三頁。	(八)徽宗皇帝作「鶻」……………	四三頁。
(九)ガンダラ佛像……………	四頁。	(十)源氏物語繪卷……………	五頁。
(十一)源頼朝似繪……………	五頁。	(十二)桂離宮玄關……………	五頁。
(十三)歌舞妓……………	六頁。	(十四)浮世繪(春信作助六見立)……………	五九頁。
(十五)ヨーロッパ民族大移動の圖……………	三頁。	(十六)レオナルド・ダ・ヴィンチ作「最後の晩餐」……………	六六頁。

目次終

一 現代の不安と東洋文化

一、所謂科學的文明

人は現代を科學の時代と呼ぶ。科學従つて機械の利用は新聞、雜誌、書籍の類から交通機關、電燈は勿論のこと、衣服の類、その他日用品の些細なものに迄及んでその恩恵を蒙らぬものは殆んどないと言へる。就中交通・通信機關の發達は目覺しく、飛行機飛行船の實用化を始め、無線電話、ラヂオ、電送寫眞の發達は、殆んど地上の距離を無視せしめる迄に至り、數百年前まではその際限さへ知られなかつた地球の表面も、時間的には全く縮小されたといはざるを得ないのである。人々は居ながらにして、遠い國々の出來事を知り、その文化的産物を味ひ、これらの國人に隣人としての親みをさへ感ずる。かくの如くにして科學の發達は、人間生活の種々の災害を除くばかりでなく、異つた文化の交換を容易ならしめ、人類の協同を助けて、文化の限りなき進歩を促すが如き感さへする。人々が科學、機械の限りなき發達を讚美するのは、まことに自然といはなければならぬ。

確かに科學、従つて機械の發達は、現代文化の人類に齎した一大貢獻である。然し我々は科學の發達に伴つた弊害を忘れてはならない。科學は人類に福祉を齎すと同時に、又人類に對する破壊作用として

も働いたのである。科學の發達の一要因が兵器に對する要求にあつたことは指いても、藥品の發達が同時に火藥、毒ガスの發明となり、飛行機の發達が空襲の危険となり、汽船の進歩が軍艦の脅威となつて現れたことに就ては贅言を要しないであらう。曾ては知られざる地方の事件として葬られた争亂が、空間的に縮小された現代に於ては、全人類をその渦中に巻き込む大戦となり、曾ては知られざる遠方の民族が、今は近い敵國として脅威となる「文明の利器」と言はれる科學の産物は、同時に人類を脅威する兇器ともなつたのである。

のみならず、科學の進歩が人間の日常生活の利便を増大する反面には、人心は安逸を追ひ焦燥に驅られて益々不安に陥る實情である。

科學を誇る現代の世相を大観すれば、人間は科學の發達により、却つて大なる脅威を感じ、機械の力に引き廻されてその本心を益々失ひつゝあると考へざるを得ない。之は科學の發達の必然的結果であらうか。然らずとせば、果して如何なる理由によつたものであり、又如何に是正さるべきものであるか。

一、經濟的不安

科學の發達と相應じ相資けて發達したものは産業であつた。十八世紀末英國に始まつた所謂産業革命以來の産業の進歩は、機械力の遺憾なき利用によつて、産業の組織を改め天然資源の開發、世界物資の

加工集散から、日常品の機械化に及び、殆んど生活の形式を一變せしめた観がある。我々の日常利用する器物が大工場の機械を経てゐるばかりではない。その一つ一つが又世界の隅々を反映してゐるのである。現代の經濟機構は世界的に密接に聯關して、一地方の經濟的變動が全世界の經濟界に波動を及ぼすことは周知のことである。

近世の産業は所謂自由競争に依つて發達したものであるが、個人的な企業に始つた自由競争は、現代に至つては全く國家的となり、その競争は所謂經濟戰であり、しかも之は單に經濟上の競争のみならず、直ちに國家間の競争を意味せんとするのである。即ち一國が産業に於て勝つか負けるか直ちに國家の勢力の盛衰を示すのである。かくて近世の歴史は、殊に歐洲列國が、その産業を有利に展開せしめる爲、原料供給地の確保と市場の開拓を圖つて、所謂植民政策に没頭して相互に衝突した歴史であつて、かの未曾有と言はれる歐洲大戦もその必然の結果とも見られるのである。大戦後の各國の經濟不振は極めて深刻で、その影響は各國の社會狀況に大變動を起したのであつたが、各國は何れもこの不況の打開策としての産業の振興に再び舊套を追ひ、内には關稅の障壁の設け、外には市場の獲得を争ひ、かくてプロツク經濟の衝突に基く戦争の危機を孕みつゝあるのである。

かくの如く各國産業の發達は、戦争の危険を誘致して、軍備の擴張を招來し、各國の國防費の膨脹は

必然に國家經濟を脅威する。

今や世界は歐洲大戰によつて破壊された經濟の建直しに失敗して經濟的不況の底に沈み、金の偏在、恐慌、物價の不安定、失業、罷業等に苦しんで打開の途に彷徨しつゝある。之は果して止むを得ざる結果であらうか。もし誤つて事こゝに至つたとすればその誤は那邊にあるか。

三、政治的不安

かくの如き經濟生活の不安は、自ら各國政治の動搖を伴ふ。この政治の動搖は歐洲大戰を機とし、戦後諸國の國力が疲弊して、各國民生活が脅かされて以來、露骨に表面的となつた。ロシアの共產主義的獨裁政治の樹立を始め、イタリーのファツシヨ、ドイツのナチス等、從來の議會政治に代つて、力を主とする獨裁政治が行はれることになつたのである。然し英、佛等と雖も勿論平穩ではなく、行詰つた國政の恢復に對策を得ず、辛うじて一時を彌縫してゐるに過ぎない。かくて經濟生活の不安に脅かされた諸國民は、國政の動搖行詰りに據る所を失つて、徒らに盲動するに過ぎない現狀である。この風は又經濟の行詰りと共に我が國にも波及した。

四、現代文化に對する不安

かくの如く社會生活は政治、經濟を始めあらゆる方面に行詰つたのであるが、その行詰りは、人間の從來の努力が全く無意味であつたと言ふ意識を伴ふのは當然で、人間は何處にその據り所を見出すべきかに迷はざるを得ない。

人間の從來の努力の無意義なことを、最も端的に生々しく意識せしめたものは、かの歐洲大戰でありその結果であつた。多年に亘る困苦缺乏の忍耐と、數百萬の人命犠牲とに依つて得たものは何であつたか。戰敗國の悲惨は勿論のこと、戰勝國と雖も、得た所は、莫大な戦債、恢復の見込みつかぬ國力の疲弊、國政の紊亂、國民生活の窮乏と人心の荒廢以外には何もなかつたと言ひ得るであらう。しかも大戰は及ぶ限りの人智がその所謂文明の利器を以て、たゞ破壊の事のみ集中せられたのであつて、その慘禍の甚大なる、交戰國民をして呆然自失せしむるに充分であつた。人々は從來の所謂文明への努力の無意義さを痛感せざるを得なかつた。人々は從來の文化に對する信頼を失はざるを得なかつた。

現代思想の不安は、本質的に見れば、要するに現代文化そのものに對する不信頼を種々の形に於て表現したものに外ならない。この不安は歐洲大戰を機として表面に現はれ、その後引續いた社會生活の動搖によつて一般化されたのである。哲學、文學、神學等に於ける所謂不安の思想はその最も著しい現れに外ならない。これらの思想は、何れも現代文化の批判をその動機とし、従つて又文化の主體たる人間の研究をその主題目とせんとしてゐる。こゝにはともかくも、從來の文化に自己を喪失した人間が

自己の本質を明かにして、之を取り戻さうとする努力の傾向が見られるのであるが、不幸にしてなほ未だ暗中摸索たるを免れない。

五、東洋文化への反省

全面的に行詰つた現代文化を打開しようとする傾向は、歐米諸國に於て、近來漸く、その西洋文化と質を異にすると考えられる東洋文化の研究となつて現れて來た。勿論東洋文化の研究と言つても、實際は、その動機も種々であり、單に對東洋の經濟上、政略上の必要からのものもあり、又考古學的、乃至異國趣味的の興味からのものも少くない。然し、そこには東洋文化の本質的なものへの關心の萌してゐることは窺はれるのであつて、このことは西洋に於ける、從來の文化に對する不信頼の傾向と併せ考へる時、自ら肯ける所であらう。

現代文化即ち西洋文化と東洋文化との相違は物質文化と精神文化との相違であるといはれてゐる。

西洋の所謂物質文化とは「自然の征服」をモットーとして發達した科學を中心とする文化である。而してその自然の征服とは實は、主として外界の自然の征服であつて、人間の自然、即ち自然的欲望の陶冶といふことは、少くとも第一義的な問題ではないのである。むしろ、人間の自然的欲望、即ち人間の自然の野性を満足せしむるために、それに抵抗する外界の自然を征服し、利用するといふことが、基調

となつてゐるのである。この意味に於て、西洋文化を物質文化と呼ぶことが出来るのである。

之に對して東洋の所謂精神文化とは、もしこの言葉が單に、物質的な文化を發達せしめなかつたことの空しい辯解の言葉でないならば、それが人間の自然なる、本能的な欲望を統制することを第一義的とした文化と言ふ意味でなければならぬ。即ち本能的欲望に支配されない人格的活動を第一義的の目標とし來つたものといふ意味でなければならぬ。蓋し文化とは人の自然の状態に對して、進歩的陶冶の加へられる姿を言ふのであつて、この意味で、人間本性の自らなる要求の所産である。この人間の本性は、自然的・本能的なものに對して言へば人格的、物質に對して言へば精神的のものであるから文化と言へば元來精神的のものである。従つて、普通に物質的形式のみに對し文化といふ言葉が用ひられて居るけれども、その事實は人間本性の蔽はれた状態に外ならないから、決して眞の意味の文化とは言へない。勿論西洋文化と雖も人格的、精神的なものを目指し傾向が全く無いわけではない。たゞ之がその根本に於て徹底せず、しかも大勢から見れば、文化のかゝる基礎が殆んど反省されなかつたと言へるのである。

西洋文化に行詰つた歐米人が東洋文化を回顧するに至つたことは、自然であり又喜ぶべきである。西歐に於けるかくの如き喜ぶべき傾向に對し、我が國民の多くは未だ西歐文化の迷夢から醒めない。然し

東洋文化の把握に於ては我が國人が彼等に比して遙かに有利であるのは明かである。此の際我々は率先して歐米人を導き以て東洋文化の把握を資け、現代文化を眞に是正せしむべき責任を痛感すべきである。

然らば東洋の文化とは如何なるものであつたのか。長い東洋文化の歴史は、眞の文明の眞意を果して具體化してゐたのであるか。之に對して西洋文化は如何なる意味を有するのであるか。以下に東西に於ける文化の歴史的經過を明にして、之等の問題に答へ、以て行詰つた現代に處するの道を明にしたいと思ふ。

從來一般に用ひられてゐる文明又は文化なる語は東洋固有の眞の意義を誤つた意味に於て、即ちそれは歐語のシヴィライゼーション Civilization の翻譯語としての文明、又 Kultur の翻譯語としての文化なる意味に於て使用されて居る。しかもこの譯語としての文明文化なる語の意義が往々混亂されて使はれてさへ居る。東洋固有の眞の意義の文明とは人間の完成、即ち吾人の認識、判斷、行爲を統御して統制あらしめる即ち正しからしめる所以の基本精神機能の體現を意味するのである。文化とは之を期して精進する過程である。

二 東西兩文化の淵源と基礎

一、支那古代文化と孔子

支那古代文化

支那の文化は上古西方から移り來つた漢民族が黄河の流域に開いたものである。傳説によれば黃帝といふ英邁な君主が、多くの部落に分れてゐた漢民族を統一して國家の基礎を固め、文字、舟車等を作つて文化の基礎を据え、後、堯(陶唐氏)・舜(有虞氏)なる有徳の君主が相繼いで善政を布き、徳を以て民を導き文化を向上せしめたと傳へられてゐる。

堯が有徳の舜に、舜が有徳の禹に位を禪つたのを後世禪讓と稱するのであるが、禹の時その子啓に徳望があり、帝位を繼ぐに至つて、帝位が世襲されることとなつた。禹の後夏朝は十有餘王四百餘年、暴虐なる桀王に至つて人心を失ひ、湯が之を伐つて王位に即き、商朝(後に殷朝)の基を開いた。殷朝はその後二十有餘王、六百餘年、暴虐なる紂王に至つて昌の子發が之を伐つた。之が周の武王である。かくの如く、王室が徳を失つた際に、有徳の人がその人望により、之を伐つて王位に即くのを放伐といふ。勿論殷の頃までは未だ傳説の時代を脱しないが、この傳説に示された禪讓放伐の觀念は、支那の國民性を示

すものとして、注意すべきである。禪讓は徹底した哲人政治の理想を示すものであるが、かくの如きことは、實際の人間社會に於ては終始その實現は期待し得ず、世襲の制となつたのは人間性の自然なることを實證したものである。然し放伐の觀念には有徳の人は天命により不徳の君に代つて民を治むべく、民はこの天命の革まる時に際して、不徳の君を去つて有徳の人に就くことが出来るといふ所謂天命思想があるのであつて、この天命思想に支配される限り、革命は當然の結果として絶えることなく、従つて野心家の蜂起となり、爾來今日に至るまで、國家統一に不安動搖を繰り返してゐるのである。

周の初代は武王で、父文王(昌)以來徳望があり、弟周公旦、重臣太公望等に輔けられて王位に即いたのである。周公は殊にその英明なる資質と高邁なる識見とを以て、禮制を整へ、樂を正して、文化の基礎を定め、後世の模範となつた。周の文化は孔子も「周は二代に監み、郁々乎として文なる哉、吾周に従はん」と言つた程で、その二代とは夏、殷を指し、周初は支那文明大成の時代として後世から理想とされてゐるのである。

支那の文物は周初、始めて整備し、文運の興隆を見たが、終に形式に墮し、文弱に陥るを免れなかつた。かくて周の半、史家の所謂周室東遷の止むなきに至り、之と同時に前後五百餘年に亘る所謂春秋戰國の亂世を現出し、王道衰へ禮樂廢れ、諸侯は自家の勢力伸張のみを圖ることとなつた。而してこの間

に、亂世を救はんとして、人格的自覺に徹して王道の眞諦を道破し、徳を以て道き、禮を以て齊すことを力説したものが孔子であつた。

孔子

孔子は魯の國、今の山東省の地に生れた。紀元前六世紀の半頃、今からおよそ二千五百年の昔である。論語の傳へる所によれば、自ら「十有五にして學に志し」と言つてゐるが、道を學んで擧げず、博く學藝に通じ、遂に人格完成の域に達するに至つた。初め魯國に用ひられ、國政に與つて功を擧げたが一旦魯を去り、春秋の亂世に天下を周遊して、王道の實現に努力した。然し時勢非にして、遂に之を實現することができず、再び魯に歸り、古典を整理して、其の理想の顯章に努め、七十三歳を以て歿した。その間門弟三千人と算へられ、孔子の教は、長く後世の思想界を始め、東洋文化を司配することとなつたのである。

孔子は十有五にして學に志し、克己復禮、遂に五十にして天命を知るに至つたが、その境地を「仁」と自ら稱した。仁といふ言は從來から親愛の意味を現す言として一般に用ひられてゐたものではあるが、孔子の用ひた意味は之とは全然異り、孔子の人格をその實質内容としてゐるのである。されば、これを知らるためには、少くも我々が孔子その人に近似する迄に至るより外に方法はない。この事は又、孔子の

境地の高遠な事と共に、孔子自身その弟子に仁を許したのが、三千人中唯顔淵（名は回）一人であつたのを見ても知られる。これがため後世、仁そのものを直接に説明しようとする試みが續々生じたのであるが、仁の理解は仁者にならざる限り不可能なのであつて、此の點は特に留意しなければならぬ。孔子がかくの如き仁を敢て力説したのは、かゝる基礎に立たない限り、眞に和平を實現することが出来ないから身を以て説示したに外ならない。

孔子はこの最高の門弟顔淵に、「克己して禮に復へるを仁となす」と訓へた。即ち古訓の集大成たる禮に式つて己れの素質を陶冶し、その極到達した人としての極致に於ける判断行爲が、後進の規範たる價値を有つこと、言ひかへれば創作的に禮を行ふこと、これが仁であるといふのである。これは仁を解くに仁を發揮する方法とその結果の相貌とを以てしたのであるが、これがやがて仁を最も正しく説明することに外ならない。之を孔子の別の表現を借りれば文質彬彬然る後君子といふに當る。

禮は、孔子にあつては、じつにかくの如き内容實質を有つたものであつた。而してこの意味に於ける禮をこそ、孔子は「徳を以て道き禮を以て齊す」政治の根本要道として期待したのである。それは結局「禮は和を用て貴しとなす」とあるやうに社會の秩序和平の爲に外ならないが、決してたゞ外面的形式的のものではなかつた。全く仁と不可分のものである。この事を孔子も特に「人にして仁ならずんば、禮

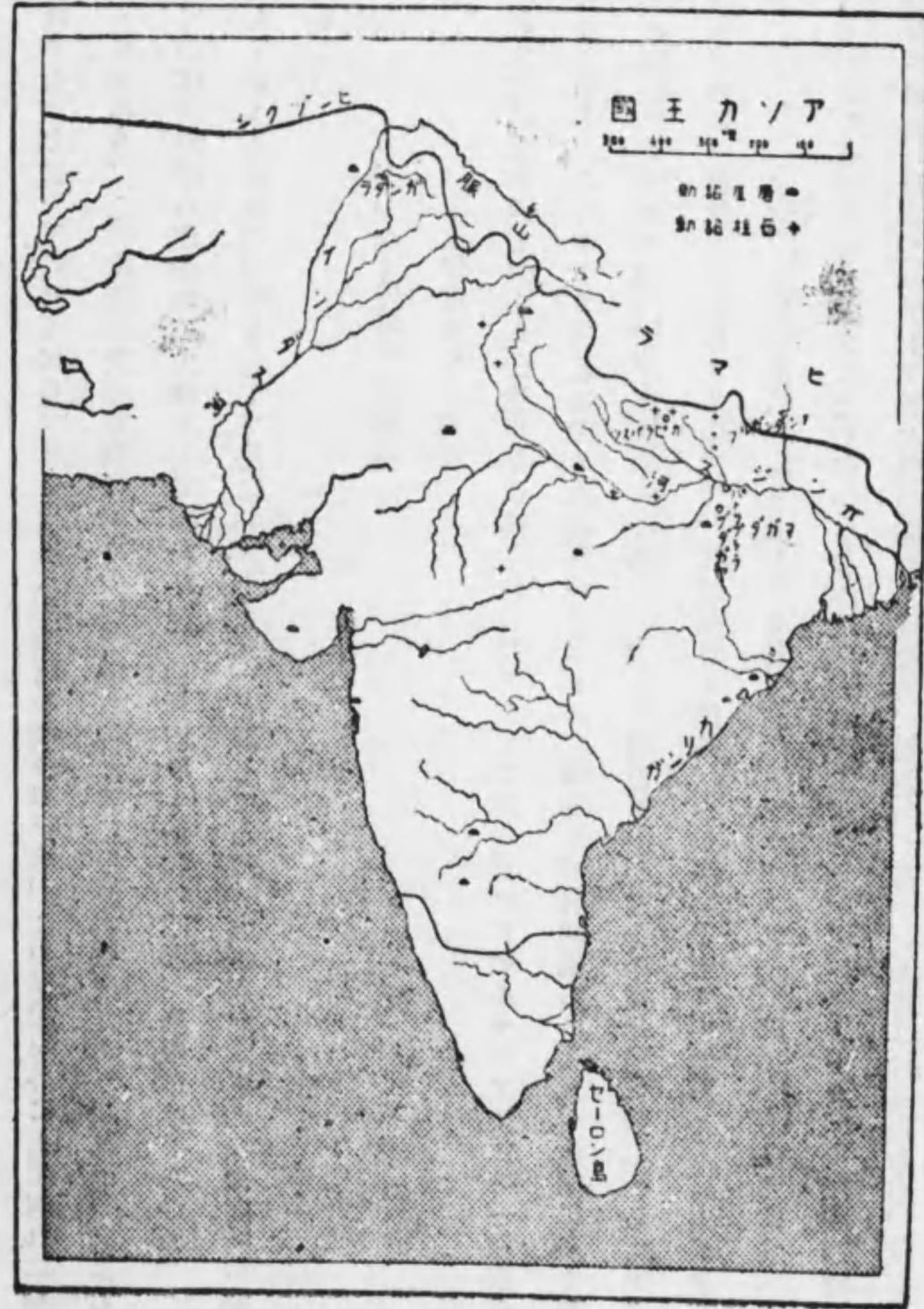
を如何せん」と言つて警めて居る。まことに人間生活の秩序和平は、この保證を外にして何れに期待され得るであらう。この意味に於ける和は東洋の經濟即ち經世濟民の根本原則であり、孔子の訓ふる所はやがて前代に於ける政治の三大事として説かれた正徳利用厚生惟和の回顧、基礎付けであつた。而してかゝる社會の現實を指して易に「天下文明」と稱してゐる。之が東洋本來の「文明」の語の意味である。

二、印度文化と釋迦

印度文化の起源

印度文化は上古西北方から印度半島に移り住んだアーリア族（インドゲルマニア族）の一種族の開いたものである。このアーリア族は初め西北部のインダス（印度）河流域地方に入り、次第に多くの原住民を征服してガンヂス河（恒河）流域地方に進行し、この地方を中心にしてその文化を開發したのである。

ガンヂス河上流地方に定住する頃には、大體制度も整ひ、専ら祭事を司つて僧族とも言ふべき波羅門（ブラーフマナ）、武事に従ふ王族、貴族を主とする刹帝利（クシャトリア）、庶民から成る吠舍（バイシヤ）、主として原住民の征服されたものからなる奴隸とも言ふべき首陀羅（スードラ）の所謂四姓なる階級の別が確立した。このアーリア人種は極めて宗教的、思想的であつたと言はれてゐるが、就中最高階



級たる波羅門は、一般信仰の原始的な多神教に思辨を加へて、多くの神々を系統立てることから始め、遂に最高神、宇宙萬有の創造者たる梵（ブラーフマン）を最高原理とする、謂はゞ宇宙論を主とする神學的思想即ちヴェーダ思想を發展せしめたのである。然るにこの頃に至つて刹帝利が思索に力を致す餘裕を得るに及び、このヴェーダの神學的思想的なる傾向に嫌らず、波羅門の教權の弊に墮せざる自由な立場から、實踐の主體たる自我の省察を第一義的問題として、我（アトマン）を最高原理とする、謂はゞ人格論を主とする思想を發達せしめることとなり、かくて梵我の統一を中心問題として、後世の所謂ウパニシャッド思想を展開したのである。然しながらこの間兩思想は次第に融合し、再び波羅門の傳統に司配されて、徒に思辨に流れるに至つた。

後、ガンヂス河下流地方に定住する頃になつて、人種の混血もその度を高め、刹帝利の勢力も頗に上り、吠舍もその財力を増し、この地方を中心として従來の傳統を離れて自由に思索する風が著しくなつた。かくて刹帝利の人々の間には再び自我の省察を主とする思想が盛んに行はれることとなつた。この間所謂六師を代表者とする種々の思想家が輩出し、現在印度に勢力のあるジャイナ教もこの時創まつたものであるが、就中人格的自覺に徹底して、印度思想史のみならず、東洋文化に重大な轉回を與へたものが釋迦であつた。

釋迦は支那の孔子と略同時代、即ち紀元前五世紀（北傳に據る）に生れた人である。印度の北部、今のネパール地方の迦毘羅（カピラ）城主の長子として生れた。喬答摩（ガウタマ）、悉達多（シッダルタ）と稱し、釋迦とはその屬する種族の名である。天資聰明、廣く諸般の教育を受けて之に熟達したが、王城と妻子とを離れて遁世生活に入った。通説では太子二十九歳の時とする。遁世は當時の慣習で、道を求めるものは世俗の束縛を脱する為、多くこの生活を選んだのである。

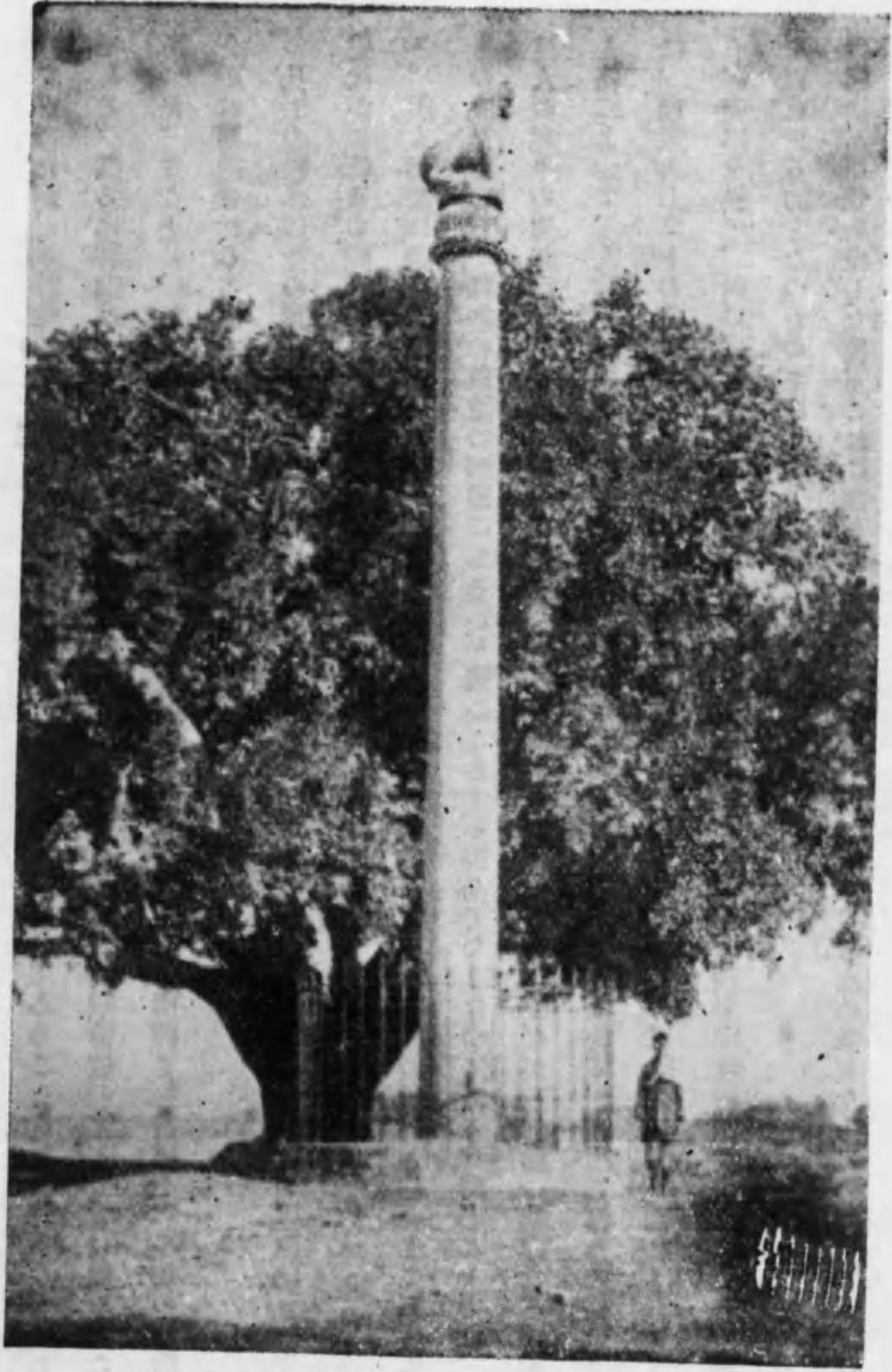
釋迦は遁世の後、諸所に道求めて名のある師に就き、當時の慣習に従ひ苦行により悟りを得ようとなつたが單なる苦行によつて、悟りを開くことの不可能なるを察し、遂に之等の師を離れ、獨自の立場かつ目的を達することが出来た。即ち出家生活六年の後尼連禪（ニレンゼン）河畔、佛陀伽耶（ブダガヤ）の菩提樹下に正覺或は無上正覺を成したと傳へられてゐる。その悟りの境地は我々の容易に窺知し得ない所であるが、要するに自覺に徹底して、完全圓滿なる人格的基礎の確立に達したものと云ふことが出来る。正覺を成した後の釋迦を佛陀といふが、佛陀とはもつと覺者の意味で、即ち人間の認識構成の世界觀的執着から覺めたことを、夢から覺めたといふ比喻を以て現したのである。

從來のパラモン思想は、現世の苦樂、從つて現世を脱却しようとして、變化生滅のない常住不滅の世

界を求めたが、本體論的な思辨に墮し、依然として認識の世界に止つてゐることに氣が付かなかつたのである。然るに釋迦は、その認識構成の思辨機能を絶對なものとする人類傳統の迷妄に、目覺めたのであつた。まことに、かゝる基礎の上に立つてこそ始めて、我々の思辨が明確さを發揮し、一切の判断の公正が期待されるのである。

孔子の教へはその言行を録した論語によつて知ることが出来るが、釋迦の教へはその儘記録されず、幾代かの傳承の間に、多くの説明的の註釋、解釋理論が附加されて、非常に敷衍されて傳へられてゐる。然も佛教は印度の國民性に基いて信仰の形式を採つたため、種々な傳統の信仰と結合して發展したものであるから、釋迦の眞意の那邊にあるかを窺ふことすら容易でなくなつてゐる。然しこゝでは、印度人の從來の思想活動が、或は思辨に陥り、形式に墮して、迂余曲折を経ながら、遂に釋迦なる實在の人格によつて、人間完成の境地に至つたことを知れば充分である。釋迦に於て、實現された人格の完成は、理想としてその後久しく思想生活、從つてあらゆる文化生活を通じて、印度を司配したばかりでなく、支那を経て、遂には我が國にも大なる影響を與へ、儒教と共に所謂東洋精神、從つてまた日本精神を育成する力となつたのである。

釋迦が正覺を成した後、これに師事尊敬するものが現れ、後世の僧團の基をなした。釋迦の入滅は八



柱石たし剝を勅詔の王カソアるあにフルガンダンナ

十一歳と傳へられてゐる。

アソカ王

佛滅後百餘年、紀元前第三世紀後半、マガダ國にアソカ王が出で、その武威を以て印度半島の統一を成就したが、カリンガの大虐殺を轉機として、佛教により心の安住を求め、非常なる努力の結果正覺に到得した。この人格、大精神によりアソカ大帝國の政治は一大變した。このことは各地方に、或ひは岩壁、或は石柱に刻みつけられた勅文に詳かである。これらの詔勅の結論とも見らるべきものに「道を成ずるの方はたゞ二つのみある。その一はダルマ（教法）の遵守、他の一はダルマの内観である。」この二者に於て、ダルマ遵守の功果は輕微である。之に反してその内観の功果は重且大である。」とある。之は即位二十七年六十一歳の時の勅文の最後の一節で、之は佛法當初の修道の方法を知り得る、又同時に釋迦菩提樹下修道の方法をも窺ひ得る唯一の資料である。

三、日本文化の基礎

建國の精神

我が國は天照大神の皇孫瓊々杵命に下し給うた神勅

豐葦原、千五百秋之瑞德國、是吾子孫可王之地也、宜爾皇孫就
とよあしはらのちいほあきの瑞穂の國は、これ吾がうみのこのきみとますべきくになり、いまし皇
而治焉、行矣、實祚之隆、當與三天壤、無窮者矣
孫ゆいてしらせ、さきく、實祚の隆へんことあめつちとともにはきはまりなかるべし。

に始まり、人皇第一代神武天皇は建國の詔勅に、この大御心を承け繼ぎ給ふて

上則答乾靈授國之德、下則弘皇孫養正之心。
かみは乾靈授國の德に答へ、しもは皇孫養正の心をひろめん

と仰せられた。これ我が國體を成す所以のものである。

「養正」の正とは「ただし」と訓まれるが、「ただし」なる國語に就ては、辭典にまさしき説明と思はれるものはない。意を以て之を解けば、まごころが「ただに」即ち「ただち」に働いた場合を言ふ。「ただ」は「そののみ」、或は「直接」の意である。即ちまごころなるが故に事物に純粹に、従つて直接に働きかけることが出来るのである。まごころの働いてゐる姿をすべて「ただし」といふ。まごころのない限り、ただしいといふことは有り得ない。養正とはこのまごころを養ひ育てる即ち發揮することである。

まごころの「ま」は純粹の意味を現はす接頭語である。多くの場合、無智幼稚なるが故の純粹、教養なき素朴、自然主義に類する如き考へを以て之を誤り解してゐるが、之等の精神は何れも人としての未熟

又は未完成の状態であつて、或る場合單純とは言へるが眞の純粹といふ状態ではない。こゝで言ふまごころの眞の純粹といふのは如何なる條件の下にも濁らず動揺されない精神を意味してゐる。かゝる純粹さの状態に就ては、孔子の「吾一以て貫く」と言つた言を借りれば明瞭であらう。この孔子の言の意味をそのままに表はしてゐる文字は即ち漢字の「正」であつて、我が先賢が建國の詔勅の御心を表現せんとして、この「正」字を採用したことは、自ら宇宙的眞理は一であることを物語つてゐる。かくの如く「皇孫養正の心を弘むる」といふことが、即ち「乾靈國を授けたまひし德に答へたてまつる」所以である。徳とは大神の大御心であり、この大御心に答へたてまつる所以がまごころを立派に養ひ育てあげること即ち養正以外にないことが、この神勅と詔勅との關係によつて明かである。これが國體を成す所以であり、皇道であり、又我が神道である。この精神を明かにし、養正の方を教へたものは聖德太子の文獻を最古のものとする。

聖德太子

國內の統一が完成し、國威が朝鮮半島に及ぶやうになつて、大陸の先進文化が次第に我が國に傳へられることになつた。大陸文化の粹を成すものは、孔子の精神及び釋迦の精神であるが、この兩精神の眞意を把握し、之を我が建國の精神に融合して、我が文化の基礎を据え給ふたのが聖德太子であつた。



寺 隆 法

大 陸 文 化 移 入 の 迹

聖德太子は厩戸皇子と申上げ、推古天皇元年立太子、皇太子として攝政せられた。六世紀の終りから七世紀初頭に亘る頃で、當時大陸に於ては隋朝の統一が成つて國威が擧り、その影響によつて朝鮮半島に於ける我が勢力が衰へつゝあり、しかも内には漸く豪族の跋扈を見、蘇我氏專横の下に、中央地方の官紀が紊れ、國政混亂の極に達せんとするが如き有様であつた。

太子はかゝる時勢に處するに、大陸文化、就中儒教、佛教の精神を我が固有の精神に融合し、以て民心を正さうと努められた。太子の精神は推古天皇十一年位階を定めて、名を正さうとせられた所にも窺はれるが、太子の意の最も明らかに現れたのは、その親作の憲法十七條である。憲法十七條は主として

爲政者に與へられたものであるが、儒教、佛教の精髓が遺憾なく融合せられてゐることが窺はれ、しかも支那古書の成句を縦横に驅使した、含蓄深き、威儀あり品位ある大文章で、太子の學識の深奥を示すものである。

その第一條には、人類社會生活の大理想を示し給ひ「和ヲ以テ貴シト爲ス」と仰せられた。しかし眞に和することは、孔子が「君子ハ和シテ同セズ、小人ハ同シテ和セズ」と曰つた如く、仁を得たる達徳の君子たらざる限り、即ち人が内に完全な正しい心「まごころ」を發揮し得ない限り、不可能である。蓋し多くの人は、利害私情を以て雷同し、鬭争を常とするからである。而も孔子の仁を得るの方法を一般に教へることは至難事である。よつて太子は第二條に「篤ク三寶ヲ敬ヘ、……三寶ニ歸セズンバ、何ヲ以テカ枉レルヲ直サン」と仰せられた。即ち養正の他の方として、仁以上に優れた佛陀法により、しかも一般人の入り易い信仰の形式を以てせられたのである。かくて第三條に於て我が國民生活を訓へ「詔ヲ承ケタマハリテ必ズ謹メ」と仰せられて、正された心即ちまごころを以て我が國君臣の名分を深く覺り得さしめられたのである。かくて養正に導き給ふこと三年、推古天皇十五年神祇祭祀の詔勅が發せられた。之は正された心を以てして、敬神の實あらしめられたのである。

かく憲法十七條に於て太子は建國養正の精神の内容を一層明瞭にし、その方法を教へ與へられたので

あるが、之によつて我が國家の大綱、國家の理想が一層明瞭にされ、我が文化の基礎が定められたのである。太子はまた隋と國交を開いて、大陸文物の採用に努められ、又國史を編纂せられて、國體を辨へしめられたが、それはやがて又我が國の修史事業の基を成した。

四、西洋文化の淵源

ギリシヤ文化

西洋文化の淵源は、西アジアのチグリス、ユーフラテス兩河の流域地方なるメソポタミア地方と、アフリカのナイル河流域なるエジプト地方とにあるとされてゐる。兩地方の文化は四五千年以上の古代に遡ることが出来るが、この兩文化が融合しつゝ、ギリシヤ地方に傳はつて、ギリシヤ文化となり、所謂西洋文化の基になつたのである。

ギリシヤ人は印度のアーリア族と同じくアーリア族の一種であつて、ギリシヤ半島の先住民を征服して、北方より移り住んだもので、多くの都市國家を成し、全體として統一されてゐたわけではない。それらの都市の内アテネとスパルタとは最も強盛であつた。このギリシヤ人は人口の増殖につれ、エーゲ海及び黒海沿岸に盛んに植民地を作り、商工業によつて勢力を得、同時にエジプト、ペルシヤ等の文化に影響されて、その文化を進めることになつたのである。



殿神ンドイセボのムウトスバ
(式アリード)

ギリシヤの文化は、初め東方の植民地に興つたが、紀元前六五世紀に至り、アテネを中心として盛時を現出した。ギリシヤの都市は初め王政であつたが、貴族政治を経て遂に共和政治となり、その間諸都市互に競つて、文化を進めて來たのである。紀元前五世紀の初頭、東方のペルシヤの攻撃を受け、苦戦の末之を却けたが、この戦役にアテネは最も功を現して國威を高め、然もその直後、五世紀の半頃にペリクレスが執政官となつて、國政を整へ、極盛時代を現出した。所謂ペリクレス時代で、アテネの文化は此の頃最も盛んであつて、ギリシヤ文化を代表するものであつた。



ギリシヤの文學はホメロスの作と傳へられるイリアッド、オヂッセイの二大叙事詩に始まつてゐるが、ペリクレス時代前後にアイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデス等が相次いで劇詩を作つて、文學の隆盛を致し、又この頃彫刻、建築等も大いに興つた。何れも西洋後世の模範となつたのである。

シ 學術の方面に於ては、數學、史學、醫學等の成立を見たが、哲學が特殊の発達をした。哲學の原語はギリシヤ語のフィロソフィヤで、フィロは愛好の意、ソフィアは理智の意、フィロソフィアは即ち智識を愛好することである。かゝる意味での哲學は先づ

小アジアのギリシヤ植民地に發したが、ペリクレスの頃アテネにソクラテスが現れて、新生面を開き、次いでプラトン、アリストテレスと相傳へて、思辨的に組織を整へ、後世の西洋哲學に司配的な影響を及ぼす基を成した。

ギリシヤの哲學は、その理智的、分析的なる民族性に基いて發展したもので、先づ宇宙の根本物質は何かといふ問から出發し、やがて宇宙の法則を問題とする考へ方が結び付いて、宇宙論的な方向に進んだ。この傾向は印度のバラモン思想と共通な所はあるが、到達した結果に於ては異り、ギリシヤでは飽くまで知識的に發展して、後世の西洋自然科学に遂發達する原因を成した。印度に於てはこの傾向は遂に宗教に終始したのである。印度的な色彩を以て發展したものにソクラテスがある。即ちソクラテスに至つて、「汝自身を知れ」といふモットーの示す如く、思索の對象が宇宙即ち外的なものを離れて、内面的なもの、即ち人間の心に向ふこととなつた。

傳統の客觀主義に基く理智的な世界觀が行結り、所謂ソフィスト達はその反動として極端な個人的主觀主義に陥つた。これを背景とし、之を打開して生命を興へようとしたものがソクラテスであつた。ソクラテスはその打開の方法として「ソクラテスのアイロニー」と呼ばれる方法で、人の概念分析作用を竭さしめ、人本然の至徳を發揮せしめようとした。それは一般の學者の解する如く概念を明確に規定しようとする

したのではなかつた。この意味に於ては東洋的であつた。東洋的であるといふのは孔子的であり、釋迦佛的であるといふ意味である。然しその心境の差異は、ソクラテスに於けるダイモニオンを、孔子に於ける天、更にかくの如き何物をも想見し得ざる謂はば玲瓏たる釋迦佛の心境に比較することによつて窺ひ知り得るであらう。

ソクラテスが所謂徳目的な概念を規定して置かなかつたのを遺憾として、その門弟プラトンにはアイデアを規定し、多くのイデアのうち善のイデアを最高のものとして組織を立てた。之によりギリシヤの思想界は復主智的客観的傾向に引き戻される端が開かれ、この傾向に乗じて現れたものが西洋の科學の祖とされるアリストテレスであつた。之によつて直接間接に後世の西洋思想界は司配され、カントのコペルニクスの轉回を経て、現代に至つて三度内への轉回を見るに至つたのである。

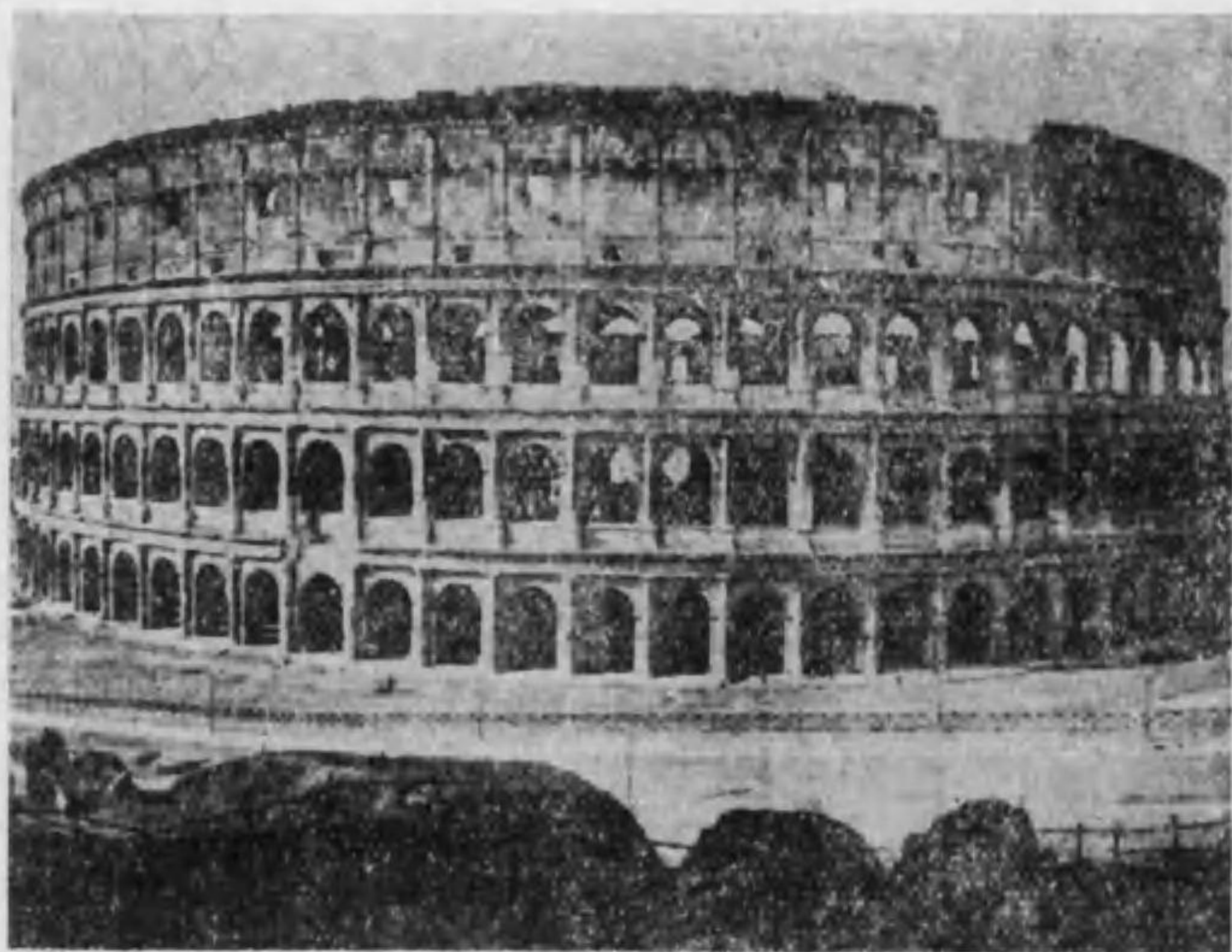
紀元前五世紀の終り頃、アテネとスパルタが勢力争ひの末終に干戈を交へて以來、ギリシヤの諸都市は屢々戦亂を繰り返して次第に衰へ、紀元前四世紀の後半マケドニアのアレクサンドル大王のために、併合統一されるに至つた。ギリシヤの文化はアテネの没落と共に衰へたがアレクサンドル大王の治下に東方殊にペルシヤ文化の影響を受け、大王の文化政策に助けられて、所謂ヘレニズム文化として廣く傳播することとなつた。アレクサンドル大王はペルシヤを征し遠く印度ガンダラ地方にまで侵入したが、

早世してその大業は中途にして挫折した。この遠征はギリシヤ、印度兩文化が、或ひはペルシヤの文物を通し、或ひは直接に相互に影響する機會ともなつた。殊にギリシヤに獨特の發達を見た彫刻の手法が後に印度佛像の彫刻を發達せしめ、佛教藝術の發展に貢獻したのは、その最も著しいものである。マケドニアは大王の死後間もなく滅び、ローマが之に代ることとなつた。

ローマ

ローマはもとイタリア半島中部の一都市であつたが、國人堅忍勇武次第に他領を征服合併して前三世紀の初頃イタリア半島を統一し、前二世紀の半頃ギリシヤの地を始め地中海沿岸一帯を征服し、更に紀元後第一世紀の初めに至り遂にアフリカ北岸一帯、小アジア、メソポタミヤ地方、ライン河以西の西歐一帯をその領土とする大帝國となつた。

ローマ人は實際を主とする國民で、政治軍事に長じてゐたが、哲學・文藝の方面には殆んど獨創性を示さず、その文化は専らギリシヤ文化の模倣繼續に過ぎず、その神話さへギリシヤ神話の色彩で彩られてゐる觀がある。ローマの進歩は即ちギリシヤ化であるとする史家も居るのである。たゞ法律の方面に於ては著しい發達を示し、後世ローマ法と呼ばれる法系の基礎を作した。又大規模の土木に異色を示してゐる。こゝにローマ人の實際的な、生活を主とする民族性を見得る。



（場劇形圓大のマーロ）ムウセロコ

の文物を破壊した種族が主としてゲルマニア族の一なるヴァンダル人であつた爲に、ローマ文物の破壊を稱して特にかく呼ぶのであるが、一般歐洲民族の野蠻であつたことを示す一事象に外ならない。

キリスト教

キリスト教は紀元前四年にユダヤに生れたイエスがユダヤ教を改革して開いた宗教である。イエスは時人に忌まれて磔殺せられたがその弟子等は度々の迫害に屈せず熱心に布教に努めた。殊に、パウルのマルティルスによつてローマ帝國治下の虐げられた人心の不安に乗じ小アジア、マケドニアを浸潤し、遂にローマに入つて、國教となり、ローマ軍の行



圖版大最國帝マーロ

ローマ帝國は、その文化に獨自性を示さなかつたが、西歐一帯をその領土として、未開なる歐洲民族に、ギリシヤ文化に接する機會を與へたのである。然し當時の歐洲民族にはこの文化を採用する能力なく依然未開の状態を脱することが出来なかつた。間もなくローマ帝國は國人が奢侈に流れて享樂を追ひ、國政の紊亂を來すと共に、歐洲民族の一なるゲルマニア族のイタリヤ侵略を受け、その壓迫に苦しんで東西に二分し、やがて西歐を支配した西ローマ帝國が四七六年に滅びて後、文物多く破壊され文化は全く滅びて永く史家の所謂暗黒時代となつたのである。所謂ヴァンダリズムとは、當時ローマ帝國の首都ローマ

く所五世紀頃西歐一帯に廣まるに至つた。當時の歐洲民族は、今に於ても如何なる宗教を有したか不明な程度の状態であつたから、キリスト教はその容易に信仰する所となつて、その後今日に至るまで歐米人の心を支配することになつたのである。

三 文化の回顧と復古

復 古

文化は人生の諧調和平の状態なる文明を期する人間の奥底に潜める本性、即ち古典によつて之を稱せば徳又は威徳の自らなる展開過程である。これこそ人類の不斷に希求し、努力してゐる所であるが、必ずしもその一向なる進歩・普及を見なかつたのが人間社會の現實であつた。人間社會の現實は、有徳の人によつて文明の基礎が確立され暫くは文化の進展を見たとしても、多くの場合人間の本性が、感覺的・知覺的生活野性に蔽はれてゐる所から、この本性の保證を喪失して徒らに形式に墮し文弱に陥り、やがて野に還るのが常であつた。野に還つた極、野蠻鬭争の難局に踰踏するの餘り復たその打開の方を求め、これがやがて人類史上に於ける復古の現象である。所謂復古とは難局打開の理想的な方法を求めること、その實はかの本性を省るにあるが、歴史を有する民族としては、史上にその方法を求めるのは當然である。だが、その求めらるゝものは、必ずその民族史上それに價する事象、即ち文獻であつて、之がやがてその民族創業の有する價値に外ならない。されば又、かくの如き創業的價値を自らの歴史に有たない民族は、難局打開のためにより優れた他民族の有する史上の事象によつて、それをより以上に

發展せしめんとしたのである。

復古の成敗は、この當然のものを見出して之を發揮するか否かによつて定まる。人類の有つ文化復興の歴史は又その失敗の歴史でもあつた。我々はその失敗の所以を討究することによつて、現代の復古運動をして再び失敗を繰り返さざる爲に、その誤りを正すべきである。

一、支那文化に於ける復古

漢

支那に於ける文化史は周初の文明に對する孔子の復古の事實から始まると見ることが出来る。この運動は孔子その人に於ては成功したが、時代が之を容れることが出来なかつた爲、結果の事實としては失敗であつた。

春秋戰國の亂世は、秦の始皇帝によつて統一されたが、覇者以上に出なかつた秦は復古の眞精神を得ず、徒らに統一を焦つて、十五年で亡びた。

紀元前二〇二年、漢が秦に代つた。漢は周の封建制と秦の郡縣制を併用したが、封建制は早く廢れて事實上郡縣制となつた。漢は前後を合せ四百餘年の間天下を保つたが、その間外征に追はれ、中頃外戚王莽の帝位篡奪あり、後にも外戚の專横、宦官の扈跋を見、充分に文化の復興を見るに至らずして滅び

た。

たゞこの間秦の焚書坑儒と劉邦項羽の争の間に失はれた古典の研究が始められ、殊に七代武帝は儒學者董仲舒の意見を用ひ、大學を興し、學識、德行ある者の養成登庸に努めた爲、學問が盛んになつた。然し當時残つてゐた書は完全のものでなく、古文の讀み難く、解し難いものが多く、學者の努力は専らこれを整へ、明かならしめることに向けられて、所謂訓詁の學に止まり、儒學者として儒教を以て學説を統一すべきことを武帝に獻策した董仲舒さへ、孔子の精神には甚だ遠かつたのである。たゞこれが爲後世の學問復興に貢獻した所に、意義が認められる。

しかも漢の前後を通じて殊に後漢に入つては國政紊亂に乗じ迷信が行はれ、之に乗じて黃帝、老子を祖とするといふ道教が行はれるに至つた。たゞ後漢に入つて一世紀の中頃佛教が傳來したことが注目すべき事柄であつた。その他武帝の頃の支那に於ける最古の通史たる司馬遷の史記も亦復古精神の現れと見らるべきものである。繪畫もやゝ行はれたやうであるが今は傳はらない。

漢時代は文運復興には努力したが孔子の眞精神を得ず、従つて周の文明の精神を發揮することに於て失敗に終らざるを得なかつた。



唐の最大の版圖

漢末、天下は再び亂れ、三國鼎立を経て、北方蠻族の侵入が盛んとなり、所謂五胡十六國、更に南北朝對立の時代を通じて、約三百年の間は文化の充分に發達する暇がなかつた。

初は老莊の學風に基き、有識者が世事を避け所謂清談に耽る風が強く、この風に助長されて道教が大に行はれることになつた。

この時代に於てその間魏、宋、梁各朝の武帝の如き群雄によりその事蹟の集積と見るべき佛教の移入が行はれた。法顯等の支那僧の印度に留學するものもあり、羅什等の印度から來つて教を傳へるものもあり、この間に佛教經典の翻譯が盛んに行はれて藏經の基を成して佛教隆盛の因をなした。六朝の末には天台の智者によつて、前代に移入された一切經の教相判釋の一大組織が大

成された。同時に佛教藝術が傳へられ繪畫、彫刻が大いに進歩することゝなつた。又詩文等がやゝ盛んとなり、陶淵明等の出づるあり、所謂六朝風の華麗なる文體が行はれ、以上の要素が相集つて、唐代文運の隆盛を現出する素地をなしたのである。

唐

漢以來の支那は六世紀の終り、北朝の出なる隋朝によつて漸く統一されたが、間もなく唐朝が之に代つて天下一統の政を布いた。唐は太宗（在位六二六年——六四九年）の治世に、制度を整へたが、この制度は朝鮮及び我が國の古代制度の模範となつた。

特に教育に關しては、京師に國子學、大學、四門學等を設けたのを始め、地方にも州・縣の學校を設け、又考試によつて官吏を登庸する制を定めたので、學問が普及し、文運の興る機運を促進することゝなつた。

唐の強固な統一を背景として發現した唐代文化は、漢代の文化とその後各地に發達した文化の上に、唐の國威が西域に及んだ結果傳來した西方文化の要素を採り入れたものであつて、その盛時は六代玄宗皇帝（在位七一二——七五五年）の頃であつた。

唐代の儒教は、未だ漢以來の訓詁の學を脱せず、従つて一般に學問上の活動は盛んとはならなかつた。

然しながら前代からの佛教は此の頃漸く普及し、唐の初世に玄奘・浄土等が印度から歸つて佛教典の翻譯に從事した頃（七世紀——八世紀）を中心として、玄奘の法相、唯識、賢首の華嚴思想の如き世界觀的思想が榮えたが、漸く註釋學的な傾向に陥り、佛教の眞髓を逸したのである。これに對し唐の中期には既に六朝の末より慧可の流を汲んで佛教の眞髓を別に求めて居た人々の中から、禪宗なる宗旨の特殊の發達を見た。又玄宗の時眞言密教が入つて新に歡迎された。我が奈良朝の佛教は主として法相華嚴の影響を受け、平安初期（八世紀——九世紀初）最澄、空海の入唐によつて天台宗と眞言密教とが風靡することになつたのである。

佛教の流通を背景として、印刷・繪畫・彫刻・建築等は頗る發達し、畫風も後の所謂片宗畫、北宗畫の傾向を現した。工藝品は西方の影響を顯著に受けてゐる。

殊に唐代文運の隆盛を代表するものは詩文の隆盛であつた。詩は唐詩選等に見らるゝが如き、就中、玄宗の頃の李白（太白）、杜甫（子美）は詩聖と稱され、やゝ後に白居易（樂天）があり、又韓愈（退之）、柳宗元（子厚）はその文章を以て著れてゐる。兩者の文章は浮華に墮した六朝風に對して、古文の雄健なる風を傳へてゐる。

之を要するに唐代に復興された文化は、儒學としては漢學套襲の域を脱せず、之に満足せざる學徒の

佛教に走るものを生じて、佛教に著しい展開を見たのであるが、大體に於てその何れも成功を見ることが出来なかつた。たゞ太宗の學問獎勵の結果、文藝の方面に於ては未曾有の隆盛を來して、燦然たる文物を齎み出したが、それはやがて眞の復古の失敗の姿であつた。蓋しこの復古は確固たる精神的基礎を缺いたが故にそれはまた同時に文弱の徴でもあつたのである。

宋 明

唐朝は約三百年にして、十世期初頭文弱に墮した末滅亡し、約五十年に亘る所謂五代の紛争を経て、宋朝の世となつた。

宋朝の治世を通じて北方蠻族の勢力が強く、漢、唐の時代に比し、國威は十分に伸びたとは言へなかつた。たゞ之が爲漢人の民族心を刺戟する結果となつたことを認めることが出来る。

文化は大體に於て、唐代の套襲であつて、殊に文藝は前代を繼いで盛んであつた。従つて普及されたと言へるのであるが、普及はまた同時に通俗化でもあり、支那の文藝は宋以來元・明と次第に通俗化されて、戯曲、小説等の發達を見ることゝなつたのである。

この頃の異色をなすものは宋學の勃興である。漢以來の所謂訓詁の學に行詰つた思想活動は、隋・唐の佛教隆盛を來したが、唐の初中期に佛教各宗派が大成されて教義等が整へられると共に傳誦註釋等に

行詰つた。かくて思想界はその活路を儒學の復興に見出ださうとしたのである。宋代の儒學の盛況は漢以來のことであつて、しかもこれが佛教・道教の流行の後に起つたものであるため佛教・道教の影響を多分に受けた所にその特色がある。

道教には神仙傳説を本とする迷信的要素が極めて多いが、特にその思想方面を採り出して見れば、支那人本來の形而上學的要求の産物である易の思想を據り所としてゐる。易は陰陽の二元によつて、宇宙間一切の、従つて人事百般の變移の理法を説明しようとしたものである。然し易は主として人間處世上の要道を説くことを主眼としてゐるため理論的には粗雑であるのを免れない。大體に於て道教は佛教に倣つてその宗教的體裁を整へて來たのであるが、道教の教理によつて形而上學的要求を充した支那の思想は、宋の時代に入つて、大乘佛教に現れた現象論、心性觀の影響を受けて、獨特の本體論、心性論を發達せしめることゝなつたのである。本體論又は形而上學と言つても、支那の思想は元來實踐を重んずる傾向が強く、殊に當時流行した禪宗の影響を受けて、その主眼點は人間心性の形而上學的研究にあつた。因に禪の影響は儒學者をして安んじて道教を採らしめ、その修養の方として坐禪を採用せしめた所に窺はれる。

宋學の最初を成したものは十一世紀中頃の周濂溪であつた。彼はその太極圖説に、太極而無極なる宇

宙の本體から陰陽及び木火土金水の五行が出て、万物の化生する次第を説き、この考へ方を推し進めて儒教の説く道德の基礎を興へ得るとしたのである。

儒教の行詰りに際して學者の思想はこの本體論的傾向を歓迎して、邵康節・張橫渠・程明道・程伊川と相ついでこゝに所謂宋學の興隆を見、これを集大成したとも言ふべきものが朱子であつた。朱子は十二世紀後半に活動した人で、極めて多才、博學、多識と言はれ、形而上學（本體論）的立場から心性の研究に基き、儒教の説く道德を詳細に説明規定した。その結論とも言ふべきものが朱子の所謂格物致知である。朱子はその學の大成の爲に従前の訓詁註釋を捨て、資料の検討と批判に據つた。この原典批評的の傾向は又南北朝以後の我が學風に影響した。

朱子は又司馬溫公の資治通鑑に據つて通鑑綱目を著し、大義名分を正すことに努めた。これは後に我が國の大義名分論の基になつたが、王朝の變遷の繰り返された支那の如き國柄に於て、しかも宋を正統としようとする見方の制肘を免れず、完全なものと言ふことは出来ない。かゝる大義名分論の出たのは、恐らく當時北方蠻族の脅威を除いて國家的な統一和平を實現する爲に民心を指導せんとしたものであつたと考へられる。

朱子と略同じ頃陸象山は、殊に強く禪學の風を受けて心即理、即ち我が心が直ちに宇宙に遍滿充塞し



鶉 蘇宗皇帝作

「鶉」は北宋末の關熟の文士の撰者蘇宗皇帝の人のである

てゐる天理に外ならないことを強調して、一派を成したが、これは後に明の中頃王陽明の學に影響を與へたものである。

宋時代の學問の普及に就ては、印刷の行はれたことを見逃すことが出来ない。紙が發明されたのは後漢の頃であつたが、唐の頃木版の法が行はれ、初めは主として佛書に用ひられたものが、この時代には一般に利用されることになつたのである。宋時代には活字も作られ始めたらしい。因みに製紙法と印刷法は唐の頃西域に傳はり、西歐にも傳へられて、近世文化の普及を助けたのである。

宋もやがて文弱に墮し、十三世紀後半遂に蒙古に滅ぼされ元朝の世となつたが、蒙古人は元末末の民であつたため、當時の文化は唐・宋の模倣的繼續

に過ぎず、元は百餘年で滅び明朝の世となつた。

明の時代は思想の方面に於ては、宋學が普及し、殊に朱子學が全盛で、學者が概ね朱子の説を宗とする風が強く、その學弊に對して、十五世紀の終りから十六世紀の始めへかけて王陽明が出た。陽明は朱子學が形而上學に流れ、理論を弄び、末節に拘泥するのに反對し、陸象山の學風を繼いで知行合一を主張して良知の説を立てた。所謂陽明學で、この學風は以後朱子學に代つて盛んに行はれた。その弊は實行を重んずる結果、やゝもすれば知を輕んじ、無反省、無批判の直接行動を誘發する所にある。之を要するに朱子學は陽明によつて批判せられた如き缺點をその最初から有つて居つた。然し陽明も時勢の要求に驅られて實行に急ぎ、實行の基礎原理として良知の説を作したに過ぎない。「格物致知」と言ひ「良知」と言ふも彼等によつて意味された知は、決して孔子の「知命」ではなかつた。然しそれらの學説はやがてその人柄の反映であつた意味に於て、復古の精神努力は窺ひ得るも、孔子その人を逸した點に於ては遂にその人でなかつたのである。この意味に於て宋朝の復古も尙自己の掘り下げの足らなかつた點に於て成功出来なかつたのである。なほ是等大陸の復古運動は我が國に移入されて、鎌倉・足利・徳川の各時代の思想に影響した。

明朝は十七世紀中頃、滿洲から起つた清朝に滅ぼされた。清代の文化も大體に於て前代の套襲にすぎなかつたが、たゞ學問に於ては乾隆、康熙の獎勵によつて、宋・明時代の學問が哲學的思辨に墮したに對し、朱子の研究態度の半面であつた古典研究が盛んとなり、只管古意を明かにしようとして所謂考證學が起つたのであつた。然し考證學も遂に古學の精神を把握するに至らずして、今日に至つてゐる。清朝の時代は西歐人東漸の時代で、文化に歐化の風が見られ、清朝は西歐勢力の壓迫と、内政の紊亂とに堪えず之に乗じた漢族系統の活躍となつて、一九一一年遂に亡び、以後支那は共和政の名の下に、内争紛亂を續けることになつたのである。

之を要するに、支那の文化は、秦以後漢、唐を二大時期として、宋、明、清等の盛時に、復興の機運を見せたのであつたが、周文明を發揮した孔子の精神は遂に把握されず、従つてその根柢に眞の人格的自覺の立場を缺いたが故に、全體としては周初の文質彬彬たる文明を復興することは出来なかつた。たゞ文化の斷片として、傳統的地盤の上に佛教精神の傳來等もあつて、人間精神の深みを見せる文化活動が間々現れたことを認めるのみである。かくしてその根本の精神を失つた支那は、現時に至つて西歐文化の處置に全く窮し、徒らに西歐民族の野望に困惑して適從する所を知らない有様である。

二、印度文化に於ける復古

釋迦なる人格がその自覺を徹底せしめた所に創つた佛教は、紀元前三世紀アソカがその眞精神を政治に發揮し、佛教の弘通に努めて以來、全印度に弘まることになつたが、當時尙バラモン教は依然として根強く民心を司配し、バラモン派の王の時世には佛教の排斥、教徒の迫害も屢々行はれ、その間消長はあつたが中世まで兩者對立平行して行はれて來た。

佛教そのものに就て見れば、佛滅以來教團が組織され、教義が系統立てられるにつれ、種々解釋上の相違を生じ、部派對立の状態に入つた。教團は見方によつては常に復古の運動の集團である。蓋し佛法を維持せんとする教團の人々は、佛陀とは何ぞやといふ問題に常に回顧せねばならない本來の使命を有つてゐる。だがこの回顧が、多くの場合民族的思辨により理解へと向けられる結果、印度人としてはヴェーダ的傾向を採るに至つたのは止むを得ないことである。思辨によつては何物をも把握し得ない玲瓏たる釋迦の心境は遂に空觀を生むことになり、之が所謂小乘の涅槃思想である。之を尙ヴェーダ的的發展させたのが所謂大乘の般若思想であつた。かくて釋迦の實體は主知的なものとして把握され結局佛陀を逸した。かゝる大乘運動は、二世紀の交ガンダラのカニシカ王外護の下にその隆盛を見、所謂ガンダラ文化の背景となつたが、それはやがて佛教のヒンヅー化の過程に過ぎなかつた。

大乘佛教は、本来の釋迦の教へを中心とし、印度人の思想的性質に基いて、傳統のバラモンの信仰と本體論とが結び付いて發展したもので、印度人の思辨を示すものとしては、興味を乏しくないが、本来の



孔子なる人格に具現した仁に達し得なかつたのと同様である。

像佛ラダンガ

の下方化文教佛はとこたし化術藝形造が教佛
るれら見もとルボンシ

釋迦の精神からは、離れたものとなつて、復古運動としては失敗であつたと言はなければならぬ。このことは支那に於て孔子の場合に於ても弟子達の研參は孔子に於ける仁、やがて孔子その人を問題の中心としながら、思辨概念に墮して行き、又後世の宋學が、理論の精密を來しながら、遂に

その間に於て釋迦の佛陀たる所以を闡明し、且つそれを發揮せしむる方法を完成したものを現存法華經の純粹な核心的なものに見出す。然し法華經は滔々たる般若思想の中に於て現在の如き般若思想の添加挿入を受け、西域・支那・日本に於ても遂に般若的大乘經典として取扱はれ來つた。かゝる般若の傾向は法華經をかくの如くならしめたに止まらず、益々民族的傾向を發揮して遂に七八世紀ヴェーダンタ思想の中に没入し終つた。この間の消息を窺ふ實例として所謂眞言宗が想起される。眞言宗が善無畏、不空等によつて支那に招來されたのが玄宗の初世八世紀の初頭であつた。これは七世紀半太宗、高宗の世に入竺した玄奘、義淨等によつては全く傳へられなかつたものである。然るに眞言宗は自ら南天竺の佛法と稱してゐる。その内容を見るに、その本尊は佛如來とはいふが從來の大乗經典に跡を絶つてゐた大日如來であり、その最も重んずる眞言及び儀軌なるものは全くブラフマ(梵書)の復興を思はせる。かくてこの民族的傾向はその極まる所、ヴェーダンタ思想をも民間信仰なるヒンヅイイズムに墮在せしめ、思想の統一、民族の統一を失脚して遂に國家までを失はしめざれば止まなかつたのである。

三、日本文化に於ける復古

大陸文物の移入

聖德太子が支那文明の移入に努め、小野妹子及び留學生を隋に派遣されて以來、僧侶・學生の支那に

留學するもの多く、儒教、佛教を問はず、支那に發達した學術文藝が盛んに移されることゝなつた。殊に隋朝に代つた唐朝の治世は、佛教及び文藝に隆盛を見た時代で、その燦然たる文物が續々と傳へられて、奈良時代を飾つたのである。此の頃我が國人は始めて盛大な文化に接觸したのであつて、従つて唐風模倣の風が極めて強かつたのは、明治維新後の歐風模倣と比較することが出来る。形式に捉はれて形式を整へるに急ぐ唐制の模倣に偏した大化の改新を始め、佛教に對する迷信崇拜等はその顯著なもので一時は風俗さへ唐風に倣つたと傳られ、次第に國民的精神の稀薄を來し、國政紊亂の徵も現れるに至つた。たゞこの間大陸の文化に倣ひながらも、大陸の勢力に對する對抗意識を通して、建國の精神に歸らうとする傾向も現れ、天武朝、奈良朝に於ける國史の編纂を見たが、然し大勢は平安朝中期まで三百年餘は、大體大陸文化の模倣的移入であつた。而して弊は弊として、この間我が國人は漸く文化に習熟して平安中期の所謂「やまとぶり」を發揮し得るに至つた所に、我が國民的素質が顯られる。

平安文化

宇多天皇の御代、唐末の亂世に際し遣唐使、留學生の派遣が停止されて、自ら鎖國状態になつて後、推古朝以來先進文化を學んで文藝に習熟した我が國人本來の國民的素質は、漸く独自の創造性を示すやうになつた。平安時代の中期は我が文化最初の盛時で、しかも唐の文化の影響を強く受けた結果、特に

文藝の方面にその特色を示した。

國文學の發達には國語が自由記録されることが必要條件であつたが、我が國人は漢文漢字の使用に馴れるにつれ、漢字から獨特の假名を作り出した。その重大な轉機となつたものは奈良時代初期の古事記の記録法で、奈良朝時代には既に漢字をそのまま音符として吾が國語を其のまま記録し得る所謂萬葉假名の發達を見、之が更に發達して平安中期には假名文の出現を見た。その最初の風はこれを紀貫之の古今集序及び土佐日記に於て窺ふ事が出来る。

假名の發達につれ、大陸文化の模倣を離れて日本的なものへ歸らうとする機運は、先づ「からうた」(唐詩)に對する「やまとうた」(和歌)の復興となつて現れた。その代表的なものが、醍醐天皇の御代即ち十世紀初頭に勅撰された古今和歌集である。古今集は最初の勅撰であつて、主として奈良朝時代の和歌を集めた萬葉集に比し、觀念的に内容の深みを見せてゐる。

假名文は和歌と相應じて發達し、日記、隨筆、物語を發展した。日記に「かげろふ」、隨筆に「枕草子」物語に「源氏」が出た。就中源氏は平安文化の最高峰を成すものであつた。

源氏は燦然たる調和の世界に於ける人々の生活を描き、その人々が嬉しいにつけ、悲しいにつけ、苦しむにつけて感じた心を描いた。之が「ものゝあはれ」といふ言葉で表現されてゐる。彼等は嬉しい時樂し



源氏繪卷の一

い時之を楽しみながら一抹の哀愁を常に感じてゐる。之がこゝろあるものを煮き付けて止まないのである。源氏のものゝあはれを感じ得る者は即ち「こゝろあるもの」で、「こゝろあるもの」が人の中の人であり得る條件を具へたものである。言ひかへると野性の人間として洗練されたものである。即ち感覚知覚的な人間の洗練された姿である。かゝる人達が相互に、又環境に對して感ずる感情はやがて情操の世界なのである。一方から見れば之等の人間の創作したものが御堂關白時代の文化の姿であつた。源氏物語の主人公は人間の満足するかゝる凡ての條件を興へられてゐる。然しこの主人公は、喜んで楽しんで、常に一抹の哀愁を感じてゐる。源氏の用語としての「ものゝあはれ」は、場合によつて淺深種々の情緒に用ひられるが、その中で上述のものがその究極の意味を有つのである。いひかへれば人間として感受し得る最も満足な

中に於て感ずる哀愁である。この哀愁は何處から來るか。それは外面形式の整備のみの文化によつては満足し得ない人間本性の示唆である。源氏は之が何であるかは少しも説明しようとはしてゐない。たゞ如上の飽滿な情態に於ける人々をしてかゝる情緒を感じしめて居るだけに止まつてゐる。要するに源氏物語は悲觀的な著書でもなければ、懷疑的でもない。かゝる人々の生活を平叙して我々に小説中の人々と同じ「ものゝあはれ」を感じしむる。人である以上必ず之を感じ、求め、發揮しなければならぬ所のものを、この物語りが我々に示唆して止まないものである。我々が普通要求し努力して止まない一般文化の極致に飽滿した人間の、當然感じなければならぬものを突付けてゐるのである。この意味に於て源氏は世界に匹敵するものを有たざる文學である。而して源氏は御堂關白のその時代（十世紀—十一世紀）と著者の天才との合作と言ふべく、こゝに我々は平安文化の粹を窺ふことが出来る。若し當代の人々、この源氏の暗示する所に反省したならば、文弱に流れて我が史上所謂院政時代、又源平時代、鎌倉南北、足利、戰國時代と次第に墮落の傾向を辿つた事實は如何に異つたものとなつて現れたであらうか。平安時代に於て我が國人の創造性はまた藝術に現れ、繪畫に大和繪と呼ばれる日本畫風が大成され、書道、彫刻、建築等何れも大躍進を改變して、日本趣味によつて調和されたのを見る。

大陸文化の模倣の後を受け、國民的自覺に始まり、特に文藝の方面にその獨創性を示した我が文化もやがて、その精神を失つて文弱に墮さざるを得なかつた。優美の形式を追つた藤原氏以下の朝臣は、國家的自覺を失ひ、徒らに自己の權勢を追ひ享樂を求めて我が國政の本義を失し、國政の弛緩紊亂を生じ、天下の騷然たる、遂に朝臣の收拾し得ざる所となつた。この争亂の世に武力をもつて起りやがて政治の實權を握つて、國家の難局を收拾したものが武家であつた。

武家時代は十二世紀末源頼朝が鎌倉に幕府を開いて、政治の實權を行つてから、明治維新迄約六百七十餘年に亘る。政治の實權が武家の手に渡り、朝政に代つて幕政が行はれるに至つたのは、平安朝時代末期の情勢止むを得ざる所であつたが、武家政治は要するに武力を基礎として成されたものであつて、之を以て終始せんと欲する時は外國は知らず我が國に於ては國體の精神を没却せざるを得ぬ結果となることは明かである。文弱の極、野に還ることは止むを得ぬ數である。文弱を來したのは藤原氏を主とする朝臣の罪であつたが、武家が天下を收拾して後その權勢の維持を圖らうと欲した所に國體に反れる淺間敷失態があつたのである。従つてこの時代を通じて、文化の諸相は、國體の精神を逸したるが爲、その文化の根本に於て常に何等かの歪曲を以て現れざるを得なかつた。其の著しいものが所謂武士道であつた。この時代の思想を司配したとされる武士道に中心的地位を占める忠の觀念なるものは、我國の如き

世界無比の國體下に於いては、我國民の美風が眞の對象に迷惑して私黨的なものに歪曲されて現れたもの



朝 頼
繪似るあで物産一の向傾的實寫

のに外ならなかつた。然し勿論歪曲されたと言ふことも、我が國に於て始めて然か云へるのである。此の點について種々史家學者の間に明辨を欠く憾があるが、歐洲は勿論支那、印度とてもかゝる判断は起り得ないのである。我が國に於ては、國體に顧れば、歪曲さるゝことなく眞の文化として文明を發揚し得る可能性があるからこそかく言へ

るのである。武家時代を通ずる最も著しい弊は、實力あるものが司配的地位を得ようとする所謂下剋上の風である。實力あるものが司配しようとするのは人間社會の通常である。たゞ我が國に於ては特に之を

批判するが如き意味を有つた下剋上なる言葉が行はれた所に、なほ力の司配を全くは是認せざる國民的意識が窺はれる。

武家時代の文化は、文化の普及、民衆化及び之に刺戟を與へた宋、明、清の支那文化の傳來及び彼我を貫いて流れる復古の傾向と云ふ經緯によつて織り成された文である。

文化の普及又は民衆化と言ふのは、平安朝時代殆んど貴族に限られてゐた文化が下剋上の趨勢に驅られて武士に及び更に町人に及んだ事實であつた。その間或ひは武士の好尚、町人の趣味に彩られて、文化の特色は異つて現はれた。復古の傾向とは我にあつては我が國民性が意識無意識に思想的に國家生活の眞の統一を反省して、王政の本道、従つて建國の精神に還らうとする要求であり、文藝の方面から見れば平安朝時代の王朝文運の盛時に還らうとする要求であつた。

武家時代は鎌倉（十二世紀末—十四世紀初）、室町（十四世紀半—十六世紀末）、江戸（十七世紀初—十九世紀後半）の三時期に大別される。

鎌倉時代は武士的質實剛健の風の最も顯著な時代であつて、前代優美の方面に發揮された我が文化は、この氣風を背景として謂はゞ武骨なる姿を以て表れた。その質實にして現實的な氣風は、建築に質實、彫刻、繪畫に雄勁なる寫實の風を示し、その剛健なる風は前代の和文に對して、和漢混淆の簡勁なる職

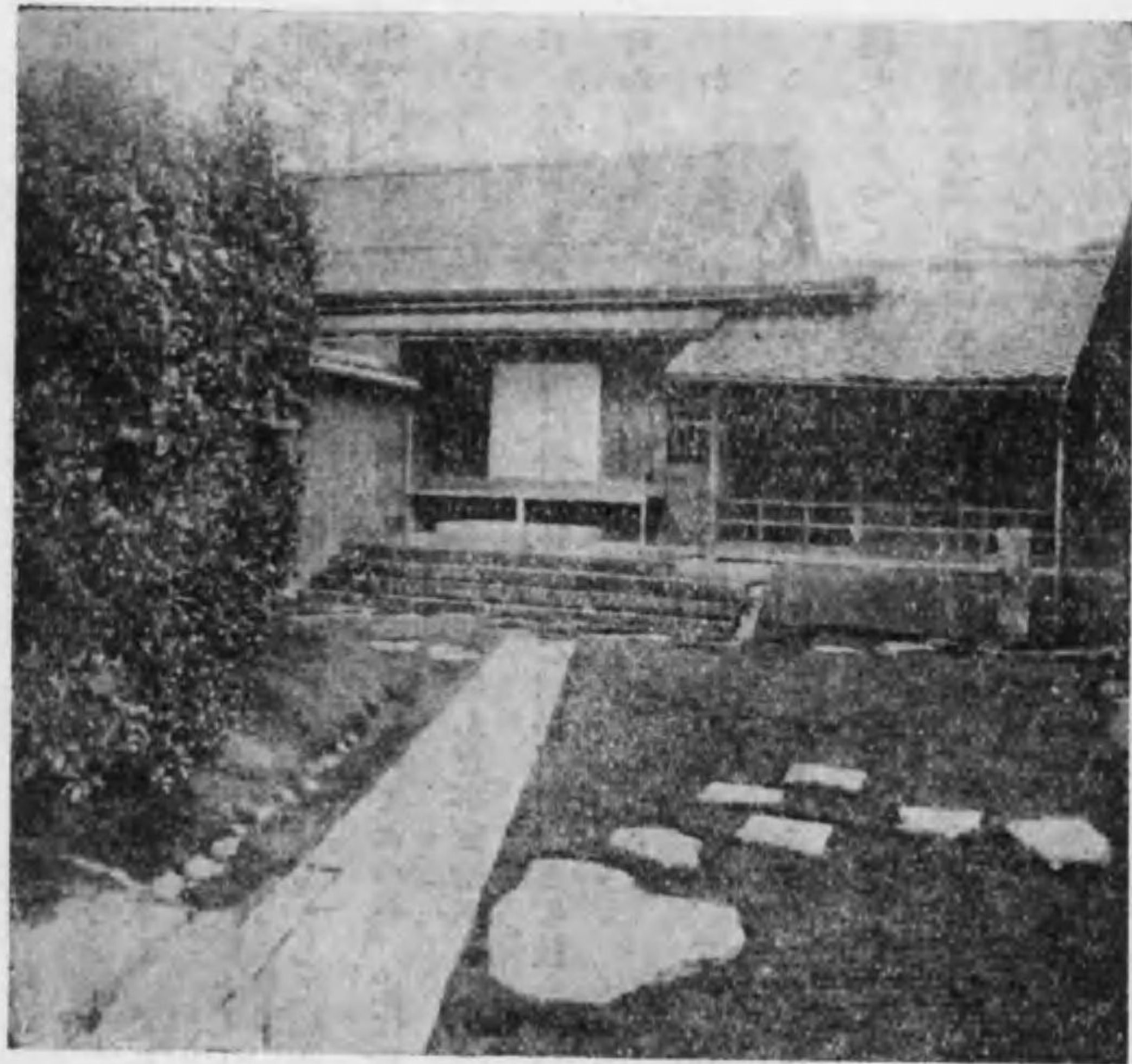
記文學となつて現れた。

平安朝以來の國民的不安は簡易な民衆的佛教を要求し、之に因つて鎌倉初期に於て他力的民衆佛教として大成されたものが念佛宗であつた。又他方その反動としては宋傳來の禪宗が武家の好尚に適して擡頭し來つた。この自力他力兩極端の宗旨を統一せんとして現れたのが日蓮の宗旨であつた。學者の所謂日本佛教なるものはこの期に於て成立したのであつた。之は政治の分野に於ける統一に對する信頼を失つた國民の不安の要求が別種の統一を生んだ事實である。この意味に於て宗教的要求には成功であつたが、宗教が我が國體内に於て特立した結果、國體との統一に於ては復古の成功とは言ひ得ざるものではないからうか。

かくて佛教の普及は下剋上の風と相俟つてやがて、文化の普及民衆化の素地を與へたものであつた。

この時代に於ける復古の傾向は、特種な神道を生じた所にも窺はれるが、承久の亂となり、朱子學の傳來もあつて遂に建武中興を見るに至つた王政復古の運動が、その最も顯著なものである。

建武中興の後南北朝を経て、室町時代は、鎌倉時代がその善政によつて幕政を維持し得たに反し、幕府にその人を得ず、大體に於てその勢威振はず、遂に所謂戰國時代の争亂を招來すべき氣運にあり、到底健全なる文化の發現すべき時代ではなかつた。たゞ京都室町に於ける將軍の豪華なる生活を背景とし



庭前の宮離桂

大偉のルカシラク……てし越超をのもるな式的形るゆらあ
一トウター るあで準規いのもるなの本日のてべすて於にさ

て、特に美術工藝の方面に特色を出したに過ぎない。かの鎌倉時代採り入れられた禪宗の氣風は漸く美術、工藝、茶の湯等に現はれた。この頃の文化には、一般に亂世に於て朝政の古を懐ふ風が強かつた結果、平安時代への復古的な憧憬を思はしめるものがあつた。

室町時代以來の亂世は、織田信長、豊臣秀吉及び徳川家康によつて收拾され、所謂元和慶武となり、江戸幕府の時代となつた。江戸幕府は前代に鑑み周到

な用意を以て國政を處理し、同時に鎖國策によつて治平を固くして、再び文運興隆の基を開いたのである。因みに鎖國の功罪に就ては議論のある所で、我が國人をして海外進出の雄志を挫折せしめ、西歐文化の發達に關與せしめなかつたのは今に尙遺憾とする所である。然し王朝以來の鎖國的情勢に馴らされた上、當時即ち十七世紀に於ける西歐諸國の文化は漸く開發を見た頃で、そこに採るべき重要なものゝなかつたことも思はれ、従つて耶蘇教禁止の政策として鎖國策を採つたことは當時の我が國としては止むを得なかつたかも知れぬ。

初代徳川家康は慶武興文の先蹤に従つて學問特に儒學の奨励に力を致し、武家も亦文事を顧る餘裕を得て、先づ儒學の振興を見ることゝなつた。幕府に起用された藤原惺窩の弟子林羅山は朱子學を以て仕へ、朱子學は後に幕府官學となつたが、同じ頃近江の中江藤樹、土佐の野中兼山等は陽明學を以て一家を成し、その他、山鹿素行、山崎闇斎、熊澤蕃山、木下順庵、伊藤仁齋、荻生徂徠等の學者輩出して、儒學の盛時を現出した。

學問の振興普及につれ、文學、藝術も亦、十七世紀末から十八世紀初頭に亘る元祿時代を最初の盛時として、大いに興隆を來した。その特色は町人の勃興を反映した文藝の民衆化にあつた。和歌から俳句が生れて芭蕉、其角等を出し、小説に西鶴等が出て町人の世態人情を描き、歌舞伎及び淨瑠璃・操りの



歌 舞 妓

院政白拍子よりの傳統を引く徳川初期の歌舞妓

流行は近松門左衛門を生み、幾多の傑作を残した。繪畫に於ては、浮世繪版畫の發生流行を見た。文藝は十九世紀初頭の文化文政の頃に至つて爛熟の極に達したのである。江戸時代の文藝は前代よりの王朝文化に對する憧憬が幕政下の泰平の下に漸く實力を集積した町人の世界に華を開いたものである。然し之は一種の下剋上の現象とも見られ、初より健全なものでなかつた爲、滔々として頹廢の風に流れざるを得なかつたのである。

武力による統一は世の平安を來したのであつたが、世の平安は武力の存在理由を弱める上に、學問の普及はこゝろあるものゝ



浮世繪版畫 助六の立見(信春)

江戸文化は、幕府に於ては、本朝通鑑の編纂、次で水戸藩の大日本史編纂となつて現れた。當時漢學者にして敬神尊皇の論を唱へた山鹿素行所謂垂加神道を説いた山 闇齋は思想的界に於けるその

先驅者であつた。儒學の内に止まつて、古學派と呼ばれた伊藤仁齋、荻生徂徠等は、宋學の形而上學的

好學心を高める結果を來し、その勢が古書こしょの涉獵せつれつを促し、やがてその再檢討さいけんたうとなり、儒學の方に於ては古學派こがくはを生じ、他方我が國學者こくがくしやと稱せらるゝ古典こてんの研究者を輩出せしめることになつた。

この趨勢は、又

幕府に於ては、本朝

通鑑の編纂、次で

水戸藩の大日本史

編纂となつて現れ

た。當時漢學者に

して敬神尊皇の論

を唱へた山鹿素行

所謂垂加神道を説

いた山 闇齋は思

想界に於けるその

宋學の形而上學的

學風を超えて朱子の原典批判的立場に立ち眞の孔子の精神に還るべきを唱へた。

この復古的傾向の自然の結果として、元祿の頃の僧契沖の古典研究に發し、享保の荷田春滿の世に所謂羽倉學に於て國學の傾向が現れた。國學は寶曆の賀茂眞淵、寛政の本居宣長、天保の平田篤胤と相傳へて、一學として組成された。その論ずる所は區々ではあるが、これらの趨勢の歸する所は尊皇と古道との主張であつた。これが尊皇心を促して後來維新に貢獻することになつたのである。

儒武興文の結果として學問の復古傾向、國學の勃興、王朝文藝の民衆化された再現、従つて文弱類廢士風の衰頹、幕府爲政者の無自覺等、かくの如く我が明治維新の復古に必要な條件が準備されつゝあつた際に、之に爆發の打撃を加へたものが歐米勢力の東漸であつた。

明治維新とその後の文化

「維新」とは支那の古典詩經に「天命維新」とあるのを借りたものであるが、我が明治の維新は神武天皇以來の王政の古に復すること即ち王政復古に外ならない。我が國にとつて變態的な幕政が自滅して正徳の皇道へ復歸したことに外ならない。

明治維新の大精神は明治天皇の五箇條の御誓文に最も明瞭に拜察することが出来る。殊に「舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ」と仰せられたのは武家政治に基ける陋習を打破して、國家の新たなる

活動を建國養正の精神に基いて成すべきことを明かに示し給うたものである。明治維新は聖徳太子の時と共に、我が國に於て復古の精神の最も明瞭にされ、又されなければならなかつた時期であつた。明治二十二年に發布せられた帝國憲法、二十三年の教育に關する勅語、何れも御誓文の趣旨に基かれたものであつた。就中我が帝國憲法が世界の夫の大勢に應じて、養正の精神を發揮するに遺憾なからしめんとし明治天皇の大御心から發布せられたのは、歐米憲法史上その例を見ない眞の文明的事實であつた。

明治の復古はかくの如き基礎に立つたものであるが、江戸時代頹廢の後を受け、しかも歐米勢力の壓迫を感じしめられ、我が國人はその侵略的勢力に對抗し得ることを焦眉の急とした爲、その機械文化の採用に専らとなり、その結果我が國人の優秀なる素質を以て物質的方面に於ては歐米に遜色なきに至つたが、之が爲最も重要な精神的教養を閑却し、従つて傳統の精神的基礎を没却するに至つた。明治以後の文化の大勢は極言すれば歐米化であつた。而してこの歐米追隨の風が今日に及んで、歐米の行詰りと共に我も亦行詰ることになつたのである。

彼我の行詰りに就いては、自ら歴史的に相違がある。歐米の行詰りは全き行詰りである。歐米の行詰りは之を打開すべき方を歴史的に全く新に發見し、創作し、建設しなければならぬ條件の下に置かれてゐる。即ち過去には現代歐米文化の價值以上のものを有つて居らない。之に反して、我は之を建國の

當初より我が國體といふ意義に於て保ち傳へて来た。従つて近代の日本人が之を忘却したといふ意味に於て行詰りの意味がある。従つて歐米の如き眞の行詰りとは自ら類を異し、又その打開の方途も別に嚴として存してゐる。我が國體への反省といふ易々たる一事即ち之である。

四、ルネッサンスと西洋文化

中世の暗黒時代

現代歐洲民族の主要素であるゲルマニア族が、五世紀の後半西ローマ帝國を名實共に滅してから、その諸部族はそれ／＼酋長の下に統一されて國を成したのであつたが、この民族が當時未開野蠻であつた上に、西ローマ帝國の衰亡しつゝあつた四世紀末に開始された蒙古種なるフン族の歐洲侵入による民族大移動、八世紀の初アラビアのサラセン人の侵入による移動を始めとして、大小の民族移動を繰り返したの間ギリシヤ、ローマ文化は全く荒廢し、たゞ纒かにキリスト教が蒙昧なる諸民族の迷信の間に行はれたに過ぎなかつた。史家はこの時代を暗黒時代と呼ぶのである。この時代の社會情勢を大観すれば、酋長的なる多數の君主即ち群雄の割據と、迷信的信仰と相俟つて行はれたローマのポーブ（法皇と譯さる）のこれに對する宗教的司配とが著しい特徴をなしてゐる。しかもこの間群雄互に攻伐して、自家の勢力の維持、増大に腐心して戰亂状態を續けて居たのである。



歐州民族大移動の圖

ルネッサンスの原因

サラセン人はアラビアを本據とし、八世紀の初頃、東は印度に入り、支那の唐の西境に迫り、西はアフリカ北岸を經てスペインの地に至る廣大なる地域を版圖とし、歐洲民族を壓迫してゐたが、十一世紀に至つて漸く衰へ、トルコ人の一派セルジュック族が之に代つて勢力を得、西進してわづかに余喘を保つてゐた東ローマ帝國を侵すに至つた。これが爲キリスト教徒の聖地とせるエルサレムなるイエスの墳墓の地は、その領有に歸し、トルコ人が元來マホメット教徒であつた爲歐洲人はその迫害を受けて、その參詣を

阻止されることになった。こゝに於て、ローマのポープは東ローマ帝國の救援と聖地回復とを目的として師を起すべきことを宣し、諸侯多く之に賛同して、軍に加はり、所謂十字軍の遠征となつた。十字軍は十一世紀末から約二百年に亘り五回に及んだが、全く失敗に歸し、これが爲歐洲の事情に一大變化を與へることになつたのである。

先づ多年に亘る十字軍の失敗により宗教心の冷却を來して、ポープの權威が大いに衰へ、同時に諸侯はその兵と權とを失つて昔日の威力を墜し、群雄割據に代つて大國の統一が促進せられる結果となつた。又東方との交通の結果、地理上の知識が開けて貿易が発展し、イタリアのヴェニス、ジェノア、フロレンスを始め諸都市の繁榮を招き、これらの都市は、諸侯の衰微に乗じて、自由なる發達をすることゝなつた。かくして久しく野蠻の状態にあつた歐洲は、漸く文化の萌すべき機運に際會したのである。西洋近世文化の曙光は、先づ、ローマ帝國の故地であり、その港市の最も早く開けたイタリアの地に興つて、漸次北方の都市に及び、中央集權を完成して統一の實を擧げたフランス、スペイン、イギリスの諸國に傳はつたのである。

イタリアに於けるルネッサンス

イタリアに於ける文化發生の直接の原因は東ローマ帝國がトルコに壓迫せられるやうになつた際に、

その地の學者が、ギリシヤ、ローマの古典を携へて、漸く繁榮を來しつゝあつたイタリアの都市に難を避けた所にあるとされてゐる。即ち之が爲に古典の研究が大いに興ることになつた。都市の權勢家は多くこれを保護獎勵して、その促進に盡力したことが傳へられてゐる。フロレンスのメヂチ家の如きはその最も有名なもので、フロレンスはイタリアルネッサンスの中心地であつた。

ルネッサンス Renaissance は復興と譯されてゐるが寧ろ再生の意味であつて、その歴史的事實としては、曾てギリシヤ・ローマの文化を破壊した未開野蠻の歐洲諸民族の子孫が、この頃に、祖先が破壊したギリシヤ・ローマの文化の斷片に於てその價值を漸く認識し得る程度に發達したといふことに外ならない。従つてギリシヤ・ローマ文化そのものも復興ではないが、さすがにイタリアはその故地である關係上ルネッサンス最初の國であつた。

イタリアに於ける所謂ルネッサンスは、文藝復興とも譯される程で、特に文學・藝術の方面に盛んであつたが、その先驅をなしたものが、ダンテ（一二六五年——一三二一年）ペトラルカ（一三〇四年——一三七四年）ボッカチオ（一三三三年——一三七五年）等の詩人・文學者であつた。美術の方面には十五世紀から十六世紀に亘り、ミケランジェロ（一四七五年——一五六四年）レオナルド・ダ・ヴィンチ（一四五二年——一四九二年）ラファエロ（一四八三年——一五二〇年）が出て、西洋藝術史上の黄金時代



(作チンイヴ・ダ・ドルナオレ) 餐 晩 の 後 最

を現出した。

イタリー・ルネッサンスの餘波は、アルプスを越えて各地に飛び、文學に於ては就中英國文學の祖と云はれる、カンタベリー物語の作者チョーサー（一三四〇年—一四〇〇年）等が出で、繪畫に於ては今のオランダを中心とするネーデルラント地方にレムブラント等が出た。油繪の法はこの地の畫家によつて大成されたと言はれる。學問はこの頃、著しい發展を見なかつたが、サラセン文化の影響により、自然科学の研究が起り始めた。その他諸種の發見、發明のあつた中にも、十五世紀半に於けるドイツの地なるマインツの人ゲーテンベルヒによる金屬活字の發明は、後世文化の普及に甚大な影響をばしたものであつた。

各國の文化

イタリーに曙光を見た文化は、群雄の衰微と、ポーアの

權威の失墜とにより、歐洲各國の中央集權的統一が完成されるに従つて、漸く、國民文化として發展する素地を得た。かくして歐洲民族の文化は始めて起ることになるのであるが、暗黒時代以來の群雄互に攻伐するの餘風は容易に收らず、加ふるに舊來のキリスト教に對して新教が起つて、舊教と抗爭するあり、戰亂相ついで文化の發展には可成りの時日を要したのである。

初めイスパニア、ポルトガル、次いでオランダが、十字軍以來開けた地理上の知識によつて、盛んに航海を行ひ、アフリカ沿岸、印度、アメリカ等の新天地を發見して、殖民政策を行ひ、大いに商業上の利を得て、強勢を來したが、文化の進展を見ざる内に勢力を失つて、イギリス、フランスが之に代るとなつた。

英國に於けるルネッサンスの影響

イギリスは五世紀の頃ゲルマニア族の一種アングロ・サクソンが、先住民ケルト族を追つて建てた國に始まり、十世紀から十一世紀にかけて同じくゲルマニア族の一なるノルマンの侵入があり、兩者が融合して、今日の英國の基礎をなしたのである。始めキングと諸侯との勢力は甚だしく異らずキングの暴政も屢々あり、キングと諸侯たる貴族、國民との間に抗爭が繰り返されて早くから憲法政治の始源を見た程であつたが、一五五八年にエリザベスがクエーンとなるや、この頃に至つては既に諸侯の勢力も衰へ

て、中央集権の實も擧り、加ふるにエリザベスは其の善政によつて民心を得、國家の統一は強固となつた。殊に一五五八年スペインの海軍を撃破して、その制海權を失はしめて以來、國威とみに揚り海軍が發達して商工業が興り、英國現代の富強の基をなしたのである。

かくて、その在位四十五年間に國家の統一と國運の隆盛を背景として、國民性を反映した文學が盛んとなつて、エリザベス朝文學と言はれる英文學史上最初の盛時を現出した。西洋第一の劇作家といはれるシェークスピアはこの頃の人であつた。又この頃西洋近世哲學の祖と呼ばれるフランシス・ベーコン（一五六一年—一六二六年）は實驗、觀察の重要性を説いて、自然科學研究に刺戟を與へた。

國語の記録法も十七世紀初頭に至つて漸く發達し、その語彙もラテン語の國語化により補充されて豊富となり、聖書の英語譯完成によつて近代英語の基準が確立されるに至つた。

フランスに於けるルネッサンスの影響

フランスは十五世紀末頃からキングの權力伸張し、中央集権が行はれて來たが、國家の統一が強固になり、國勢の充實を見たのは、ルイ十四世（在位一六四三年—一七一五年）の時であつた。ルイ十四世は實業を奨励し、海外の植民貿易を振起すると共に、ヴェルサイユ宮殿を興して美術品を集めたのを始め、文學・美術を奨励したので、文藝が大いに興り、ラシヌ、コルネイユ、モリエール等の劇作家を

始め、文人輩出して、殊に文學の黄金時代を現出し、これが爲佛語は歐洲上流社會の用語となつたのを始め、その風俗は各國の競ふて模倣する所となり、佛國は當時歐洲文化の中心となつた。而してその影響を最も強く受けて急激に文化の發展を來したのがドイツのプロシア國であつた。

ドイツに於けるルネッサンスの影響

ドイツのゲルマニア族は、地勢上ローマの侵略を受けなかつた爲、比較的文化に接觸することが少く遅くまで舊風を残してゐた。一五三四年宗教改革者ルターの聖書獨譯が始めて完成して、近代ドイツ語の基準を成したが、獨自の風を反映する文學を出だすに至つたのは、ルイ十四世時代以來の佛國模倣の風の止んだ後である。殊にフリードリッヒ、デル・グロッセによつて強勢を來したプロシアが最も盛んであつた。即ちレッシング（一七二九年—一七八一年）を先驅者として、ゲーテ（一七四九年—一八三二年）シルレル（一七五九年—一八〇五年）の二大文豪が出た。又その國民性により哲學が盛んとなり、カント（一七二四年—一八〇四年）が出て、近世哲學に新紀元を劃した。その代表作は特にドイツ語を以て試みられた。之までは學問上の著述はすべてラテン語を以てしたものである。因みにドイツがプロシアを中心に一國家として統一されたのは、可成り遅く一八七一年、我が明治四年であつた。

ロシアはゲルマニア族の一種スラブ族を中心とする國家で十七世紀末ペートルの頃諸般西歐に倣つて一強國となつたが、その文化に獨自性を示すやうになつたのは極めて遅く、漸く十九世紀に入つて後であつた。十九世紀後半に至つて漸くツルゲネフ、ドストエフスキ、トルストイ等を出だすを得た程ヨーロッパ民族中、文化の最も遅れた國である。

歐洲現代文化

かくの如く歐洲諸民族が文化圏に入つたのは漸く十六・七世紀以後であつた。こゝに歐洲文化の特質を明かにする爲、全體的にその文化の發達を考察して見よう。

歐洲文化の基礎になつたギリシヤ文化は、之を思想的に見れば、主智的或ひは合理的の個人主義的傾向をその特質とする。歐洲近世の文化の主潮を成したのもまたこの兩傾向であつた。

イタリーのルネッサンスに續いた宗教改革運動は、歐洲人の、迷信的信仰に基いたローマ法王の壓制的支配に堪えず、之より脱却せんとしてその解放を欲した最初の文化運動であつた。之を史家が個人の自由の目覺めと稱してゐる。而してルネッサンスから宗教改革運動に至る思潮の動きは、ギリシヤの現世享樂的生活の復興として、歐洲人の心を、キリスト教の神への迷信的畏敬から、世間的なもの、物質

的なものへの所謂合理的にして自由なる尊重に轉ぜしめたものであつた。西洋史家は之を神の支配にする自然の支配、靈の支配に對する肉の支配といふやうな言葉で現はしてゐる。勿論宗教改革運動は、當時の、世俗に墮して腐敗したローマ教會に對し、むしろ個人の直接なる神への信仰を強調したものであつたが、神に對する關係に於て、個人の立場、従つて人間的なものを從來に比して自ら高く評價した所に、その本領があるのであつて、これの歡迎せられた所以は、上述の如き風潮に乗じたが爲であつた。神に基く教會の支配に對する、地上的なる主權者の支配、即ち國家の統一も亦、かゝる風潮に乗じて行はれたのであつた。我々は近世西洋史上主權の伸張が、キングとポープ及び新教徒と舊教徒との抗争衝突、幾多の血腥い事件によつて彩られてゐるのを見る。

キングの主權がポープの支配から離れて伸張され、かくて諸國家の統一を見るに至つたのであるが、所謂合理主義と個人主義の傾向は、キングの主權に對する所謂民權伸張の要求となつて繰り返された。これが最も極端に現れたのは、文化が最も進み、キングの主權が最も伸張した佛蘭西に於てであつた。歐洲文化開發の中心となつた十八世紀のフランスに於ける啓蒙運動は、その合理主義的主張に基いて、舊來の因襲を批判することから始まり、早くから政治論の發達した英國のジョン・ロック（一六三二年—一七〇四年）等の人權平等論の影響を受けて、貴族、ビショップ等の特權廢止から遂にキングの主權

を否認する思想を生じ、その結果十八世紀末所謂フランス大革命を惹起するに至つた。

元來西洋に於ける主權の確立は、支那・日本に見られた如き徳治主義の理想によらず、主として司配權系（Dynasty）の「世襲利益至上主義」とも云ふべき傾向に強く司配されてゐたのである。従つてその壓制により國民が自己の利益、權利の意識へと反省させられれば、そこに權利爭奪の争ひが起るのは當然であつて、その風は比較的早く開けた英國に先づ現れた。即ち十三世紀の初キングジョンの暴政を原因として、現代英國憲法の基礎となつたマグナカルタ（普通學者は大憲章と譯してゐる）に署名することを餘儀なくされ、間もなく議會も設けられて、キングの主權制限の基礎的條件が定められ、後十七世紀頃ジェームス一世・チャールス一世と暴政が続いた結果、一時クロムウェルによつて共和政治が實現されたこともあつた程で、間もなくチャールス二世がキングとなつたが再び暴政を行ひ、十七世紀末その弟ジェームス二世が廢せられてウィリアム三世がキングとなつてからはキングは殆んど實權を失つた觀さへある。たゞ英國民はその性質が比較的打算的であつたため、事が大體に於て漸進的に行はれたのであるがフランスに於ては、これと異り、キングの専制と特權を有せる貴族、ビショップ等の横暴とがルイ十四世以後の國力疲弊に際して、極端に走り、國民の困苦が極點に達して、その憤懣が、遂に大革命となつて爆發し、史家の所謂恐怖時代と稱する流血の慘を見るに至つたのである。

フランス大革命は西洋近世史上の大事件で、然も主權の暴政よりの解放を意味する所の所謂個人の自由、權利の平等への要求の爆發としてその影響も大きく、之を境としてフランスを始め、歐洲一帯に亘つて所謂民權が大いに擴張されることとなつた。因に西歐文化の祖とされるギリシャ・ローマに於ても、貴族と庶民との權利爭奪の紛争が盛んに行はれたのであつて、この點に於ても西洋文化はその古代文化の套襲であつた。而してこの革命の動機となつた合理主義的思想に基く自由平等といふ詞も、實際は要するに各個人がその欲望の満足を均等ならしめることに過ぎなかつた。之は各個人の飽くなき功利の要求であるが故に、従つてそこには常に實利を争ふ禍根を當初よりその根本に含んでゐる。されば如何にその組織を變へても、必ず何等かの形式に於て從來の争ひを繰り返す運命の下にあるに過ぎない。果してこれが、現代、一國內及び各國間の係争となつて現れてゐるのを見るのである。

社會思潮に現れた所謂合理的傾向と個人主義的傾向はかくの如きものであつたが、西洋文化の中心をなす科學の發達も亦同一企圖に基いたものであつた。科學の發達を促した動機は、古來からの激しい生存競争が自然の利用と武器の發達とを要求した結果、その智力を自然科學の研究に傾けることになつた所にあるが、更に歐洲人が科學を發達せしめたについては、その素質が科學的理論的分析に適してゐたが爲である。之に反して概して東洋に於て分析的理論的組織を有たなかつた所以は、生活の實際に即す

るものを作るにしても、その才能・技能に對してその人を求めた爲である。言ひかへれば、西洋は作るもの、物を主とし、東洋は作る人を主にしたが爲である。

思想方面に於ても上述の傾向が看取される。西洋の思想は體系を主とし、東洋は之を主としない。西洋に於ける理智的傾向は更に進んで理論的な組織を有する西洋哲學となつたのであるが、近世西洋哲學は科學の勃興と伴なつて現れた。近世哲學の祖と言はれる英國のベーコンは「自然を征服することは自然に従ふことである」と唱へ、實驗觀察によつて自然の法則を知ることが出来るとして科學の研究に基礎を据えたのであるが、自然科學はその後長く哲學の中心問題となつた。この間思考の基礎づけとしてデカルト、スピノザ等の所謂合理主義とロック、ヒューム等の經驗主義が行はれた。然るに十八世紀のフランスを中心とする人權論の流行は、人間の本性に關する考察を呼び起すことになつた。十八世紀の後半に現れたカント哲學は、これらを綜合統一化せんとして、近世哲學に一大轉機を與へることになつた。

カントは先づ合理主義的傾向を受けて、理性の批判によつてこの目的を達せんとして「純粹理性批判」と稱する體系を建て得たが同時にそこに自己即ち人間を見失つた結果に驚いた。この體系には人なるものゝ存在理由が何處にも無くなつたのである。即ちカントは之に對して人の存在理由としてフライハイ

ト Freiheit なる概念を蓋然的に假定せざるを得なかつたのである。而してこの基礎づけの爲に第二に「實踐理性批判」なる體系を建て、主として人格 Persönlichkeit なる事項を取扱つた。その取扱ひ方は思辯的には可成り徹底したものであつたけれども、結局、人格の本質を理論的認識の達し得ざる所であるとして、その範圍外に置かざるを得なかつた。かくカントが、第一段に於てはフライハイの蓋然的假定を餘義なくされ、第二段に於ては之が實證に失敗せざるを得なかつたのは、畢竟フライハイとなる概念につきカント自身が全くその實質内容を有つてゐなかつたからである。然し、偉大なカントをして茲に終らしめた責の一半は、我々は之を歐洲の歴史が人格的實證の實例、正しい意味に於ける文獻を有たなかつた事、換言すれば文明を有たなかつた事に歸したい。カントの思辯の努力は十分これを認め得るが、かくしてその方法論は全く根據のない不確定なものであるに止まつたと言はざるを得ない。まことに理論的思辯に終始する限り、これが必至の結果である。而して又こゝに、哲學の超ゆ可らざる限界がある。人格の本質は、人間自身の内に具體實現される外はないのである。

カント以來哲學はドイツに於て最も盛んとなり、殊にその組織的な點を誇つてゐる。因みにドイツの思想家は英佛等のシヴィライゼーション civilisation の語が充分に精神的内容を有しないとして、クルツル Kultur なる語の内容を展開せしめることによつてこの要求を充たさうとしてゐるのは興味がある。

嘗て英國外務大臣たりしグレー子は、世界大戰の眞因を明かに知る事なくしては、來るべき慘禍を避け得ずとして公おほけにせる名著「二十五年」に於て、日英同盟の締結ていけつ、それにつゞく日露戰役に於ける友邦日本の戰勝、殊にロシアの死命を制した日本海々戰を回顧くわんこした後、次の如く曰つてゐる。

『日露戰役の後、日本の人氣は非常なものであつた。この小國があの大國を打ちやぶつたのである。天性スポーツ的な英國民が、それを全く悦んだのも當然である。又我々は、船艦の構造・艦裝くわんさう、現代軍艦の如き複雑なもの、處理等、英國の教へた所を日本人が發揮した効果や、之に習熟したその急速さを賞揚しょうやうした。この喜悅この賞讃の感情は、我々にとつては自然であり、合理的であり、又正當であると考へられた。所が私は、それと全く見解を異にする一つの話を聞いた。それは在英日本人の一人が日本が今賞揚しょうやうの的となつてゐるのを見て、次のやうに回顧したといふのである。

「成る程、日本人は古くから技能に優れた國民であつた。そして日本の藝術は、實に立派なものがあつた、當時諸君は日本人を呼んで未開人とした。今、日本の藝術は昔の如く立派でない。然し、我々は如何に人を殺戮ころりすべきかを學んだ。すると諸君は賞揚しょうやうする、日本もシヴイリゼーションになつた。」

この話は世界大戰の餘程以前に、私のよく知つてゐた所である。それは事實の話か否か知らない。然しその言には、不安と疑惑を感じしめた眞理があつた。而してこの見解けんけんに對する解答は、果して何であつたか。確かにして誤なし、と考へた我々のシヴイリゼーション及び我々の道徳には、何か全く誤つたものがあつたのではないか。世界大戰は之に對し驚愕きやうおつすべき解答を與へて呉れた。」

西洋勢力の東漸と西洋文化の司配

歐洲諸國は古代からの民族闘争の餘風を受けて、近世に入り漸く文化の曙光しやうくわうを見るに至つた後にも相互に競争、衝突を繰り返して來たのであるが、この風は、ルネッサンスの頃地理上の智識が進むと共に、同時に植民地の奪取となつても現れたのである。植民地の經營けいぎやうは十五六世紀頃のスペイン、ポルトガルを先驅とする。尤もこの頃は西洋の文化も未だ發達しない時代でその目標もくひやくとなつた土地は、アメリカ大陸、東印度諸島等の未開地方を主とし、日本、支那等はその勢力ちからに脅さるゝに至らず、又文化上の影響も極めて少かつたのである。而してその未開人に對する態度の殘酷ざんこくを極めた事は、未開人を奴隸ぶれいとして顧なかつた所に最も明瞭に看取され、この點はその後の植民地經營を通じて著しい特徴を成してゐる。この植民地の擯取しんしゆと土人の奴隸視とは、今日に至つても尙その餘風を見聞する。

西歐列國の未開地侵略みかいちしりやうが東洋の文化國に延びるに至つたのは、イギリス、フランスが勢力を得てからであつた。この兩國は十七世紀の初頃からアメリカ、インド等の植民地經營に力を注ぎ、互に争つたが結局英國の勢力が佛國を壓し、英國今日の大植民地の基は十八世紀の半頃に定まつた。然し兩國とも東方侵略ほうしりやうの野望やぼうを捨てず、英は印度、佛は印度支那の侵略を企てつゝ、支那侵入の機を窺うかがつてゐたのである。英、佛の侵略の手が支那に延びたのは、十九世紀半頃、即ち約九十年前の所謂阿片戰役以後である。こ

の戦役は英國の東印度會社が印度に勢力を得て後、盛んに印度の阿片を支那に輸入し、支那國民は之を嗜好して身命を害するもの多く、之が爲清朝が阿片の輸入を禁じ、更に密賣を止める爲、英國商人の通商を禁じたのに始まつた。即ち英國は貿易保護を名として、艦隊を送り、清を脅して開港通商を強請し、香港等を割讓せしめたのである。この戦役は西歐植民政策の利己的なる横暴を、文明を失つた統制なき支那國人の遊惰、無氣力が甘受せざるを得なかつたことや如實に物語るものであり、西歐人の支那侵略の最初をなしたものであつた。支那はこれから、英、佛、露等の侵略に苦しみ、清朝は之が爲に倒れ、以後益々無統制に陥ることゝなつたのである。

歐洲列國の支那侵略の餘勢がわが國に及んだのも十九世紀の半頃であつた。我が國は幸にして、尙傳統の文明的精神を失はず、明治天皇の大御心を通して建國精神の發揚を見、この難局を打開し得たのであつた。然しその後、最も脅威を感じた機械力を中心とする西歐の文物制度を採用するに専らとなつて遂に我が國にのみ遺存する文明を没却し、所謂シヴィライゼーションのヴァンダリズムに過ぎない歐洲諸國を先進文明國とさへ信ずるに至つたのである。

四 文明の復興と日本

一、實證としての文明

眞の社會の文化の現れ方は人間の文明への精進努力を反映してゐなければならない。社會といつてもその文化の現れの原因としてはその成員たる個人の判斷行爲でなければならぬ。然しこゝに言はんとする文化は特に人間の社會生活の上に現れた所を指すのである。一般に社會生活の最も完全な形は國家であるといはれてゐる。即ち國家は人間の凡ての自然的要素と人爲的要素を最も包括的に、しかも最も強固に統一する社會形態であるといはれてゐる。又文化の發達は常に國家の統一の進行と相應じてゐるといはれてゐる。成る程支那に於ては黃帝は漢族統一の祖であると共に支那文化の祖と傳へられ、周代の文化は周室の統一と共に興り、印度に於てもアソカ王時代は印度の最もよく統一された時であつた。又西洋に就て見ても、ギリシヤの都市國家、ローマの帝國は勿論、近世に於ける歐洲諸民族の文化は、イギリス、フランス等何れもその統一と共に興つてゐる。

然し之等の歴史上の文化現象のすべてが、本論に言ふ如き文化に價すべきものであらうか。又従つて之等國家のすべてが本論に言ふが如き文明と稱すべき統一國家であり得たであらうか。

正徳利用厚生を宗とする堯舜禹湯の文明、郁々乎たる文王・周公且の文質彬彬々の文明、透徹自覺の佛陀に基けるアソカ王國の統一文明に比して、ギリシヤ・ローマ以下歐洲諸國の國家統一及び文化現象に於ては、かゝる文明を見出し得ないことは既に前章に於て之を見た所である。文化と國家統一に關しては從來二種の見地があつたことになる。換言すれば西洋的な見方と東洋的な見方とである。之を書換へれば物と人、外と内との見方の相違になる。西洋に於ては文化はその國家社會の物的條件の具備とその満足であり、國家統一はその目的の利害によつて結合された現象である。利害による集散離合の結合統一、力による兼併統一、かゝる統一相の國家は争闘の原動力たるのみである。力によるは野、力によつて徳に借るものは弱、況や力のみによつて徳にからざるものをや。人類共同の究極目的たる和平を招來することは庶幾されるものではない。かゝる國家内に於ける絢爛の相は實は文化に非ずして文弱の事實現象に過ぎない。やがてそれによつては淫蕩腐敗凋落の一路を辿るのみで文化の向上を見得るものではない。東洋固有の文明の意義よりする批判に於ては、かくの如きを文弱と稱するのであつて、眞の文化とも眞の國家統一とも考へない。

國家統一の完全な姿は、その國家が眞に精神的なる、人格的なる主權者によつて統一されてゐる所にある。即ちその統一の中心が眞に國民の精神的、人格的團結の中心たり得る所にある。かくの如き統一

に於いて始めて文化の眞の意義を考へることが出来ると言はねばならない。

國家の統治に關して、最も古く人格的精神的の基礎を發揮したものは支那であつた。

然し支那に於ては理想に急なる餘り、禪讓又は易姓革命の思想の展開を見た如く、國家は天命による人格者によつて統一せらるべきであるとした。従つて堯、舜の如き眞の人格者にあつてはこの理想と事實が一致するが、人間現象に於て必しも常にかくの如き結合を見ることは不可能である所から、然らざる場合、天意の付度は極めて隨意のものとならざるを得ない。かくして天子の位は、自ら天命を受けたと思惟する、或ひは國民に對して天命を受けたと稱する、力ある野心家に口實を興へる破綻あることを免れない。こゝに支那に於ける統一の中心の動搖、従つて統一の強固となり得ざる所以が存し、かゝる考へ方の趣く所は王と言ひ民といふとも天に對してはすべて天の生民であるが故に、王侯將相何ぞ種あらんやと叫ぶものを生じて遂に國家統一の所以を失はしめずんば止まない。

この點は歐洲諸國に於ても同様であつた。普通、王權神授と譯されてゐる Divine Right of King の思想は實はキングがその權力下のロード等に對して自己の權力を維持するための政策に過ぎなく、之はやがてキングとロード等との争ひの反映であつて、その間に互に民衆を利用した結果、民權を次第に發達せしめて又々共和制を蒸返すことになつた。之はもとゞ個人主義的な基礎の上に成立してゐる現象で

あるから當然の結果である。同じく個人主義の上に立つ支那の眞面目な天命説すらその實の具現のない場合には上述の結果を見たのであつて、況や始めから爲にする所ある政策の結果がかくの如くなることは當然過ぎる程當然である。

然るに我が國は、これ等と全く異り、國家の中心たる天皇が、大神の正系として、神徳を具現し給ふ現人神として統治し給ふ國體である。支那に於ては、政治の理想として徹底した徳治主義は、その後その努力にも拘らず幾多の興亡を経て遂に確實に國體化し得なかつた。印度に於てもアソカ王の理想もその頓挫の後再び之を具現するを得なかつた。然るにこの理想を實現即ち國體化し來つたのは獨り我國のみであつた。その所以は神武天皇の建國養正の詔勅、聖德太子の憲法十七條、明治天皇の五ヶ條の御誓文、教育に關する勅語等に審かである。

然しながら我が國體の精神は万世一系と共に常に一貫してゐるにも拘らず、これら三大時期と稱される如く、再び、三度、それが特に宣揚せられた所以は、何故であらうか。之は我が國民として熟慮しなければならぬ點ではなからうか。

二、危惧すべき我が國民の文化的態度

この三大時期の第一たる建國の養正の詔勅に於て國民の向ふべき所は既に明かである。それにもかゝ

はず第二の憲法十七條、第三の御誓文・勅語を拜せざるを得なかつた所以に對しては、我々は深く反省を要する。兩時期は何れも我が國の最大難局であつたことは既に前章に説いた。又之が如何にして醸成されたかに就ても論じた。現代の我が國民は、祖先の如く、三度その愚を繰返さんとしつゝある。こゝろあるものは自ら招いた難局を口にすることを恥づべきであらう。我々は一刻も早く覺醒しなければならぬ。

國體と言ひ、建國の精神、日本精神といひ、又は精神文明と言つても、そのやうなものが、物的條件に依存するものではなく、人を離れて存するものではない。こゝに人と言つても人類といふ生物の意味ではない。即ち人格ある人といふことで、人格あるといふことは我が國に就て言へば建國に詔らせられた國體の精神なる養正を得たことを意味するのである。

一口に養正と言ふが一般に考へられ勝ちであるやうな形式的な、徳目の單なる實行ではない。饒舌なる理論の問題でもない。

人々は容易に尊皇敬神を説く。然し養正に非る限り、正しい尊皇敬神の所以ではない。我々は何よりも先づ養正を知り、養正に努めなければならぬ。それはやがて自己の人格の純化、眞の意味のまごころの發現に努力してゐることである。

かくして國民各自が養正に努め、人格的立場に覺醒する時、社會の利己的、功利的立場は自ら消失せざるを得ないのである。無恥傲岸なる「自然の征服」のモットーによつて發達した西洋文化、それが主流をなす現代似而非文化は、かくして始めて、眞に人の文化として、その基準を得る。思想の安定は勿論のこと、法治は國憲國法遵奉の實を得、憲政も益々皇道を發揮し、經濟も所謂エコノミーなる利欲蕩生を是正し得始めて正徳の基礎の上に利用厚生の意義を確保し得て、東洋本來の意義の經世濟民に復し、かくして科學の力、機械の力も眞に文明の利器たる所以の處を得、現代不安の叫び、行詰りの事實は根本的に一掃せられるであらう。かくあつてこそ眞の文明である。而してこゝまで徹底するのでなければ、如何なる打開策も結局困難を將來に繰返すに過ぎないことは人類の有つた過去五千年の歴史が證して餘りある。

世界は今やかくの如き分岐點に立つてゐる。その成敗の分かゝる所は、畢竟して偏へに我が國、我が國民の上にある。世界人類の爲のこの重責を果し得るか否かは、一に國民各自の養正に俟つのみである。

昭和九年十一月二十五日 印刷
昭和九年十一月三十日 發行

世界文明批判

定價 拾 錢

(送料共)

文部省内

編輯兼
發行人

財團 社會教育會
法人

代表者 片岡重助

東京市小石川區關口水道町四十一番地

印刷人

三友社印刷所

會 根 豪 三

版權
所有

頒布所

東京市麴町區
裏霞ヶ關 四

社會教育會館

振替東京五五三五〇番
電話銀座二三二六番

事業

- (一) 社會教育團體の連繫
- (二) 社會教育委員の指導獎勵
- (三) 社會教育學院の設置（社會教育従事者の養成）
- (四) 優良社會教育團體の獎勵並に社會教育功勞者の表彰
- (五) 教育懇談會
- (六) 社會教育に關する講習會講演會並に資料展覽會等の開催
- (七) 社會教育研究調査部
- (八) 講師派遣
- (九) 社會教育パンフレットの無料頒布（特に皇太子殿下御降誕に際しては奉祝記念事業として「皇國の榮」なるパンフレットを全國男女青年團、婦人會及男女中等學校等に總計約六萬部無料頒布せり）
- (十) 支部設置（全國に社會教育者網を布く）

ため各府縣、大都市に於ける本會支部の設置に努力しつゝあり、既に設立せられたる支部の数は二十五、其他の府縣にても目下設立準備中のもの多し）

- (十一) 社會教育に關する健全有益なる圖書雜誌の編纂及刊行。（最近に於ける主要なるもの次の如し）
- (1) 「非常時國民讀本」の編纂及刊行（約五萬部）
- (2) 「國家讀本」及「青年國家讀本」の編纂及刊行（約五萬部）
- (3) 文部省編「日本思想叢書」全十編の刊行
- (4) 機關誌「社會教育」の發行（毎月平均一萬部）
- (5) 「青年叢書」の編纂及刊行（既刊七輯）
- (6) 「標準青年訓練教科書」の編纂及刊行（毎年約十萬部）
- (十二) 良書推薦
- (十三) 東洋文化復興運動

終

